始

洗禮のしたく

エ、シ、ボサンケット著
小泉房子譯

325-524

洗禮のしたく

エ、シ、ボサンケット著
小泉房子譯

救主降世一千九百十七年
大正六年七月

日本聖公會出版社

大正
6. 8. 25
内交

序

余は本書が能く洗禮志願者及び幼年信徒等を教導する職任に在る者の久しく感ぜし缺乏を充すに足るべきを信ず。著者ミス、エ、シ、ボサンケツトは久しく日本の都邑に於て傳道の業に從ひて種々の實驗を積み、また多くの求道者を教養して學識ある者・無學なる者・老いたる者・少き者等各種の人々と懇談するの機會を得たれば、汎く各階級に於ける信仰上の疑惑難問の何たるを知り、且つ能く之に應答するの途を會得せられたり。本書の大部分は使徒信經の詳密なる解說に當てられたり。蓋し聖洗式を領けて公會に入る人々に取りて最も緊要なる事は充分に其の信仰する神の事を知得するに在り。此の故に求道者をして誠に能く唯一の眞神の稜威と偉大

こを了解せしめ、其の獨子を遣して世の救主こなし給ひし榮光あ
る秘義を學ばしめ、且つ神を父こ信認する人々の上に其の化肉降
世し給へる御子の聖靈を下し給ふてふ驚嘆すべき事實に包含せる
無限の祝福を悟らしめんが爲には、多くの時間を費すも決して無
益にあらざるなり。特に教師たる者の忘る可らざる事は、信者間
に常用せらるゝ言辭にして未信者・求道者には意味の全く不明なる
事あり或は全く反對の觀念を與ふる恐あることなりこす。されば
多神の觀念を有する人々に對して宇宙の主宰たる唯一の神を充分
に意識せしめん爲には、先づ懇切周到に「神」てふ語を說明して其
の謬想を矯正せざる可らず。又「罪」てふ語も、多くの人々は之を
以て單に國家の法律を犯す行爲を指すのみこ解して、內部の思念

こ外部の行動こを問はず一切の身體及び精神上の汚穢を罪こ稱す
る事を知らず。其の他これに類することを頗る多し。此の故に求道
者を教導せんこする者は、耐久心こ同情こを以て凡てを丁寧且つ
明白に說示することを努むべし。本書は斯る職任を全うせんこ欲
する教役者の最も有益なる侶伴たること疑なかるべし。勿論之を
用ふるに際し、他の有益なる參考書に於ける如く、多少の智慮を
以て適當なる選擇を加へ、或部分を省略して他の部分を反覆說明
せざる可らざる事あるべしこ雖、本書は首尾一貫して將に神の家
族に入れられ、神の御子キリストの肢、天國の世嗣こせらるゝ大
特權に對する責任を負はんこする人々に完全なる準備教育を施す
の極めて肝要なる事を表明せんが爲に書かれたるを見る。終に臨

み、著者が此の責任ある著述に着手せしは、全く多數同勞者の切なる懇求に應へんが爲にして、且つ經驗に富める多くの日本人敎役者の補助と忠言とを受けたる事を茲に附言す。切に願くは、本書が神の祝福によりて多くの熱心なる敎役者及び一般讀者の用ふる所となり、著者の直接に目的とする所に於てのみならず、又他の方面に於ても多大の裨益を與へん事を。

大正六年七月

日本聖公會大阪地方部監督
神學博士　ヒユ、ゼ、フヲス識

目錄

敎師の靈的準備と心得……一
敎授法……二二
志願者の準備と心得……三五
使徒信經……四二
榮光ある唯一の神……四三
父なる神……五八
天地創造……六六
人類と罪……七四
洪水の談……八二

撰民の談……八五
キリストに關する豫言……八九
三位一體……九一
子なる神……九五
キリストの神性……九五
主の聖名……九五
御降誕……一〇一
キリストの人性……一〇八
公の御傳教……一一三
概略……一一七
主の大業……一一八
御教訓……一二〇
主の御受難……一二一
ポンテオピラト……一二三
憎まれ給ふた理由……一二五
訴へられ給ふた罪狀……一二七
服し給ふた理由……一三〇
父の許し給ふた理由……一三二
十字架……一三三
十字架上の七言……一三三
十字架の意味……一三五
十字架によりて學び得る點……一三六
十字架と個人的の救……一三七

キリストの死……一四〇
キリストの葬……一四二
陰府に降り玉ひし事……一四四
復　活……一四五
昇　天……一五三
父なる神の右に座し給ふ事……一五四
御再臨……一五五
聖靈なる神……一六三
神　性……一六四
啓　示……一六七
慰　籍　者……一六九

ペンテコステ……一七〇
教會内に於ける聖靈……一七一
聖　公　會……一七二
教會の歴史……一七六
三特色及祈禱書……一七八
聖徒の交際……一七九
赦　罪……一八三
身體の甦り……一八五
限りなき生命……一八八
信仰に就て……一九一
誡……一九五

十

信仰と服從……一九五
由來……一九九
良心……二〇〇
キリストと十誡……二〇二
舊約と新約との差異……二〇四
緒言……二〇五
神に對する務……二〇七
第一誡……二〇七
第二誡……二〇九
第三誡……二一一六
第四誡……二一二〇
人に對する務……二一二九

第五誡……二一二九
第六誡……二一三一
第七誡……二一三二
第八誡……二一三七
第九誡……二一三九
第十誡……二一四一
主の祈禱……二一四三
祈禱と禮拜……二一四三
說明……二一四三
聖洗……二一四六
聖洗の起原……二一五五

聖　奠……二六〇
契　約……二六五
一度受ける事……二六六
洗禮の名……二六七
三ッの特權……二六九
三ッの約束……二七一
聖洗の水……二七五
十字架の記號……二八二
教　父　母……二八三
教師に對する言……二八四

目　錄　終

教師の靈的準備と心得

教師の參考

箴言十一〇二十五、三十。馬太傳五〇十九。二十八〇十九、二十。羅馬一〇十六
西一〇二十八、二十九。提前四〇十六。

第一　愛と敬虔

求道者を指導教育するの任に當る者は、先づ自分自身に其職責を果すに足る丈けの準備をせねばなりませぬ、私共は神が此の世の中で最も樂しい働を委ね給ふた事を深く感謝すると同時に、此の働の甚だ重大なる事と精細な注意を要する事を感じます。深く考ふれば、人の靈性に接觸し、且つ屢々他人の品性や信仰を指導して之を造り上げ樣とするのは誠に非常な重大事業であります。

人間の靈魂と云ふものは眞に不思議な貴いものでありますから、是

が指導の任にあたるものは常に主の御前に慎み祈りつゝ働かねば或は却て之に危害を加ふる事となるかも知れませぬ。

馬太二三〇十五

私共は主イエスが御在世當時異國人を自分の宗派に引き入れんとする所の僞善なる宗教家に對し發し給ふた嚴しい擧言を憶へて注意すべきであります。故に私共は次の四者に對して愛敬の精神を盡して、此委ねられた神聖なる働を完うしたいものであります。

(一)主イエス・キリストに對する愛情と尊敬。

私共の心に、主に對する忠誠と、主を愛するの愛が炎の如く焚えて居なければ、導く所の求道者も恐らくは冷淡な信者となるの外ありますまい。

(二)凡ての同胞に對する愛情と尊敬。

キリストは人類全體のために死に給ふたのであります。私共も各個人の全體即ち其の身も魂も心も情も皆愛せねばなりませぬ。若し

必要あらば、自分が導いて居る求道者のため死をも厭はぬ程の愛を持つ事が大切であります。又自分の導く各個人がキリスト御自身の者である事を能く記憶して、普通耳にする私の求道者と云ふ考を全く捨ててねばなりませぬ。

(三)神の聖言に對する愛情と尊敬。

私共は神の聖言を愛誦し其教を守りて日常の心の思や身の行爲や口の言に之を實行せねばなりませぬ。又聖訓の中に含まれて居る奥義をば尊重する念を養ひたいものであります。

(四)キリストの聖なる教會に對する愛情と尊敬。

求道者は遂に授洗して此のキリストの教會の活ける肢、活ける會員となる筈でありますから、もしも教師にして熱心に教會を愛する念滿ちあふれて居るならば、求道者もまたその感化をうけて授洗後之と同樣な心を持ち、生涯忠實なる教會員となると思ひます。

第二　私共自身の靈的生涯

馬太十七〇十九―廿　西一〇二十八、廿九　約三〇三五〇　路廿四〇四九　徒一〇八

凡ての靈的活動は、キリストと共に、神の內に藏れたる生命によりて發するものでありまして、其秘訣は神と深く交り常に聖靈に導かれ清められるゝ事であります。品性の力や語學の才や熱心は甚だ美しい善いものであるが、之等のみに依頼する事は間違であります。また自ら卑下して此の如き困難な働は、到底自分如き者の力に及ばぬと失望の心を起すのは不信仰の印であります。自分の力の足らざる事は眞實であるかも知れませぬが、ニケヤ信經に於て「我は聖靈を信ず、聖靈は生命を與ふる主」と唱へるではありませぬか。聖靈のみが人の靈を敎導する所の最大の師であります、其故に私共が完全に神と靈の一致をなし、之に由りて靈なる神が私共を通じて人々に誠の生命を與へ給ふ事を願ふものであります。以上述べた所によりて私共は主の聖姿を昏然にする一切のけがれを防ぐべき必要を感じて、祈禱と聖書研究と度々聖餐に預る事とがこの上なき助となる事を喜として重ずるの外はありません。

約翰七〇三十七―三九　約壹一〇六七　哥後三〇十八

第三　敎理の大要素

敎ふる者の頭腦が若し明晰で無いならば其語る處混亂を免れませぬ、此課程全部を通じ左の三大項目に由りて夫々の特質を敎ふるならば大なる助となりませう。即ち第一神、第二罪惡、第三救の三項目でありまず。此外何を敎ふるにしても、此三大項目に就ては志願者の心の中に出來るだけ深い印象を與へる樣力めねばなりませぬ。最初に於て志願者の心に堅固な確信を抱かしめる事が出來たならば、其後は其人の生涯が日一日と進んで行くに從ひ、種々なる場合や境遇にふれて其信念は益發達し豐富なる生涯に進む事が出來るのであります。以上の事はキリストの十字架を中心として敎ふる事に由りて始めて完うするのであります。そはキリストの十字架は前述の三項目の意義

を明かに顯して餘す處なき故であります。

第四　教授上の權衡とその比例

信徒の靈魂を混亂さすものは半ば比例の觀念が缺けて居るに起因すると云はれて居ります。信仰の馳場を完全に走る事の出來ない跛の信者は、多くは一方に偏した教授を受けた結果であります。

されば私共は自分の知れる限り殘す處なく神の旨即ち完全なる福音、權衡を得たる聖公會の教義を說明する義務を負ふて居ります。それ故敬虔の念を以て聖なる三位一體の各位に就いて充分に教へる筈であります、私共は主イエスを完全なる神、完全なる人、歷史上のナザレのイエス、また廿世紀の今日も生きて在ます久遠の救主として顯さねばなりませぬ。敎理、實行、信仰、活動、各個人の信仰の私生涯、共同の動作等何れも適當の比例を以て教ふる事が肝要であります。

主が人を救ひ給ふた方法は、人により夫々異つて居りまして各人に相應せる言語と方法を用ひ給ひました。或る人には眞面目な考を起させるために質問を與へ、他の者には忘却して居た眞理を呼び起させ、次の者には優しき慰籍の言葉を與へ、又次の者には惠の約束を與へると云ふ樣に、夫々の心狀、性質、境遇等委しく了解し給ひました。眞に主は諸師の師であります。私共も他人を敎導する際其の人の性格を識別、觀察し得る樣、聖靈の賜を受け、主が御在世の時に顯し給ふた妙なる同情の念を備へたいもので御座います。然し人々の機嫌を害する事を恐れて其罪惡に就て無頓着らしく接する樣な薄弱な同情は宜しくありませぬ。主は非常に人の靈を尊び給ひましたから、斯る淺薄な手段を取り給ふた事は決してありませぬ、私共も主の尊き模範に習ひ、何時强く勸めて可いか、如何なる場合に靜に時の至るを待つべきか、何時懲めて宜いか、何時戒むべきかを充分に認めて之を爲し、又實際上の疑

惑を解く助となる樣力めねばなりませぬ。此の點よりして敎師はキリストが各個人になし給ふた說話や問答等をよく學んで、自分の受持つ洗禮志願者に細心注意する事が大切であります。なせなれば人々の中には心配深くして細心なもの、怒り易き者、輕率な者、倦み易き者、生來信賴心の强い者、又は反對に疑深き性質なる各個人特異の點がありますからであります、私共は務めて其の人の過去の經歷や信仰を起した動機等を能く了解し、同時に夫等の人は神に就て實際に如何程迄知つて居るか、其信仰の程度は如何であるか等に就き充分調査せねばなりませぬ。唯注意すべきは決して批評的に人々の缺點をのみ探す樣にしてはならぬ事であります。常に深き同情と愛とを持ち、且如何なる人に就ても失望する事なく各人の性格をよく調べねばなりません。

第六　難問

私共は時々即答する事の出來ない難問に逢ふ事があります。その質問の中には後日調べて答へ得る事と半ば丈け知れる事とがあります。斯る場合には正直に自分の力に及ぶ丈け返答をし、調ぶれば答へ得る質問は後日調ぶる事を約するがよい。不充分なる知識を完全ら

しく粧ふて答へる事は正しくない事であります。或問題は今尙神の掌中に神の奧義として握られ居る事が有ります、私共は之等を全然了解し得ずとも、既に神より顯されたる眞理を敎へて、其他の事は唯神の顯し給ふ時を待つのみであります。

第七　誠意と篤行

洗禮志願者を敎育指導するに唯言語のみを以てせず、實行を以て範を示すやう主は私共に要求し給ふのであります、即ち「凡そ是を行ひ且人に敎ふる者は天國に於て大なる者と謂はるべし」と敎師たるものに仰せ給ひ、又其時代の惡しき敎師を非難して「彼等は言ふのみにして行はず」と宣ひました。誠意と篤行は實に偉大なる力あるものであります

申二九〇
二九

太五〇十
九

馬太廿三
〇三

使廿四〇
十六
提後二〇
三、四

す。何人でも若し正直で眞面目であるならば、公私の如何なる處に於ても人の注意を引くと言はれて居りますが實際其の通りで、若し私共が自分の敎ふる事を日常の生活の上に顯し行くことに努力するならば憚らず敎を宣べる事が出來ます。けれども之に反して自分の生涯が人に知られぬ言行不一致のものであり、且つ多の過失や輕微な罪惡に充ちて居ることを自覺するときは、之が爲に私共は心苦しくて自由に敎ふる事は出來ませぬ。斯の如き際に私共は喜ばしい勝利者の如くならず、宛ら戰ひ敗れたる兵卒の如く成るべく良心の苛責を避んとする傾がありまず。されば私共は聖パウロの言葉の如く、常に神と人とに向ひ良心の責なく、服役中の兵士の如く注意して自己を鍛錬し、單純にして忠實な秩序ある言行を爲さねばなりませぬ。所謂些細なる事、例へば時間を嚴守する事、約束を重ずる事、他人に對して金錢上の處置の正確なる事、禮儀作法に注意する事等につきても私共の行爲の如

約十四〇
十二

何は、志願者が最も早く注目する處で、私共が思ふよりも深い印象を與へ大なる感化を及ぼすものでありまず。宜しく之を覺えて注意せねばなりませぬ。

第八　克己謙遜

彼前五〇
五

自己と云ふもの程恐るべき障碍物はありませぬ。神が私共を其働に用ひんとし給ふ時に、私共にある此自己心が屢々妨となるのであります。

若し敎師が功績を得る時に其を自己に歸する事を任せて實行し給ふ事が出來ませぬ、而してその成功は却て失敗の源となるのであります。されば自己の要求、自己の滿足、自己の利益名望等を計らんとする念から一切離れねばなりませぬ。大に罪惡と戰ふ時や、他人の魂の爲め全力を注いで奮鬪する時に、私共に缺く可からざるものは深い謙遜であります。聖ペテロは他人の爲めに惡と戰

ひ惡に抵抗し得る德を示しましたが、其は熱心でも勇敢でも、義俠心でもなく、謙遜であると敎へました。若し他人の爲め力を致し意を用ふる時謙遜な心を以て之に當るならば、惡魔の誘惑をも拒む事が出來ます。之に反して若し高慢なる心を以てするならば、神が先私共に反對して拒み給ひますから、傳道の如き麗しく尊き働に神の御助を得る事は出來ませぬ。故に自己と云ふ念を全く退け、自己を忘れて他人の爲め愛の働に心を奪はるゝ樣勵まねばなりませぬ。天使が神の聖旨を奉じて凡ての道に於て私共を守る時は、恰も今述べた如くに爲すではありませぬか。天使が自分を秘して私共のみを神の聖前に顯す如く、私共も亦助を要する人々の天使となる事を望むならば、同じく己を秘し己を無き者の如くにして人を聖前に導かねばなりませぬ。

第九　祈禱

祈禱は何よりも功果ある働の根源であり、秘訣であります。祈禱を怠る事は私共と神との關係を斷つ樣なもので、即ち私共の供給を仰ぐ途が斷絶する事となります。斯る境遇にあつて靈なる戰をなすは全く不可能なる事であります。主イエスが御在世の折其弟子等に敎へて「門を閉ぢて隱れたるに在す父に祈れ」と仰せ給ひし如く、私共は是非人を避け孤獨となつて聖トマス・アケンピスの言の如く我等の愛する者なるイエスを心の中に迎へ奉り、主とのみ物語る事が大切で、時には私共の大切なる働をも一先づ止め、全く他事を忘れて聖前に息はねばなりませぬ。他人の爲の祈禱の大なる價値を悟るに從つて、益々代禱が生涯の最も重要なる行事となるのであります。人が同胞の爲め盡す最高の行爲は、即ち其人の爲め祈る事であります。實際人が仲保の祈禱を捧ぐるに至らねば神の國に於て役に立つものではありませぬ。屢々信者は働を企てて然る後に祈る時がありますが、若し世界を擧げて主のものとせんならば、此の順序を轉倒して先づ祈禱を唯一の義務

として頼り、祈より出づる働をなすと云ふ事は第一大切なる理想であります。人々に多くの話を以て道を說き聞すよりも、其人々の爲め眞心より祈る事は一層大切でありまして、洗禮の準備の歩を進むる毎に、志願者と共に祈る事は言ふ可からざる價値あるものであります。併し神と唯一人交つて居る時に自己に委ねられた志願者のため祈る事は、種々なる敎訓を與ふるよりも其等の人に取て大なる助であります。大監督ベンソンの述べられた言に「或る古の聖徒が人に語て、我は神に就いて弟子等に語る事は僅なれど、我が弟子等に就て神に告ぐる事は多いと申された」と云ふ事がありまして私共は友の爲めに一時間祈るに依て最も雄辯なる議論や勸誘よりも優りたる助を與へ得る時があります。私共は神の拒み給ふ物を無理に願ふのではなく、其等の人に關する神の思想、目的のある所を悟り、全く神の聖旨に服從し神が私共よりも大なる愛を以て其等の人々を

愛し給ふを確信して、明確に一々其人の名を指して祈らねばなりませぬ。斯く他人の爲め祈るに因つて敎師自身にも亦勇氣、活力、希望を與へられます。監督クライトンの言に「神に事へずして人にのみ事ふるは堪へ難き重荷なり、絶えざる希望を持續する事は祈禱を怠らず爲す者にこそ得らるゝなれ」とありまして、

第十　神の充全

以上の各項を讀み、之を自分の實際の働に較べて、あまり理想が高いので到底是を實行する事は不可能である樣に感じ、新しい傳道者は或は其働の餘りに高尙なる爲め心配し失望するかも知れませぬが、然し失望する事はありませぬ。正直に考ふるならば、何人か此等の點に一も缺けたる處のない完全な者がありましようぞ。聖パウロさへも「我等己によりて自ら何事をも思ひ得るに非ず、我等の思ひ得るは神に因れり」と申して居ります。尙此事に就ては腓四〇六、七、十三、十九、哥後九

約十七〇二十八、二十一

〇八―十一の數節を充分研究して勇氣を振はれんことを望みます。

唯に男子のみでなく私共婦人も敎會の役者であります。キリストに由て選ばれ傳道の爲め遣されたる者なれば、必ずキリストが私共を充分に助けて此事業に失敗する事なきやう力を加へ給ふ事は確實であります。其のみならず私共の過失や缺點も主の聖手によりて治めらるゝ時には、案ずる樣な害を及ぼす事なく、却て其過失の中に何かの敎訓を見出させ給ふのであります。私は一度友人から聖ペテロを例證として話を聞かされ非常に慰を得た事があります。キリストがゲッセマネの園に於て敵に付たされ給ふ夜、ペテロは忠義の心よりとは云へ、愛の主なるキリストの聖旨に叶はぬ事を爲しマルコスを傷けました。實にペテロは非常な過失を爲しましたので、如何なる困難な結果が其より生ずるかも知れませぬ、然し其場合に主は直に御手を伸べて其傷を癒し大事件とならぬ前に萬事を平易に抑へ給ひました。さ

れば私共も明白な失敗を爲しましても、キリストの深い御同情と御保護に信賴する事が出來ます。弘法は筆を撰ばずとか、私共は不充分の道具なれど、主と仰ぐキリストは誠に巧なる師にて在す故かゝる者を用ひて驚くべき結果を來らせ給ふ事ないと云ふ事が出來ませぬ。此神聖なる事業のために神の御惠は私共に充分足りて居ります、何故ならば神の御力は人の弱きによりて全うせらるゝからであります。但し其弱いと云ふ事は、神の御力が自分の内に入り、全く自分の意志をも行爲をも聖旨のまゝに支配して之を使用し給ふ事を望むものでなければなりませぬ。神は信者及び未信者の中に働きて之を導き給ひます。其聖旨と道は私共人間のものとは違い、遙に尊く、榮光ある美妙なる一大目的を果すために働き給ふので私共は今充分に是を悟る事が出來ず唯僅に其一小部分を窺ひ知るのみであります。ゴア監督の言に神の王國は、其準備として地上に現存する神の敎會よりも更に廣大

哥前十五
〇五十八
可四〇廿
二、廿七

なるものである」とあります。そして此大なる御計畫御理想は未だ半も顯はされて居りませぬ。凡て神の大聖旨の中に秘められ、其の成就さるゝも神の御手の中にあるのであります。私共は各自神の御計畫、御理想の小部分に當て居るのでありますから此信仰を以て何事にも安んずる事が出來ます。神と共に働く信者には過度の心配をする必要はありませぬ。唯私共の切に願ひ且つ祈る處は、凡ての疑惑と難問を排し、只管に神を信じ神に依り頼む事によりて主の喜と平和が働人の心に充ち溢る事であります。尚同時に記憶すべきは、たとへ明かに目には見えずとも、善は確かに惡よりも非常に強く、而も常に徐々として靜かに深く働くものだと云ふ事で、キリストこそ最後の勝利者であります。

第十一　洗禮を受けたる後

洗禮を受けしむると直に志願者であつた人への訪問を廢し、或は聖

書の研究を止むるは甚だ惜むべき事であります。其等の人の信仰の生涯は受洗に由つて始まつたのみで、尚進んで按手式を受け聖餐に陪るに至るまで指導することが大切であります。凡て洗禮を受けた後には特別なる惡魔の誘惑、靈の試練が屢々起りますから、此の際善き助と慰は是非必要であります。墮落する信者の度々生じた憂ふべき經驗は、私共に此受洗後の適宜なる指導の必要な事を愈々明白に悟らしめます。たとへ相方の住所が變つても文通に由て敎へ助ける事が容易に出來ます。洗禮の準備を授けた敎師は、其の人の終生の信用すべき友として價値ある者になりたいものであります。

第十二　喜ばしき報

人を敎導く者は亦己が持てる神の惠を分け與れば與ふる程、益々惠まるゝに相違ありませぬ。敎ふる人が其弟子より得る益は甚だ多くあります。私共敎ふる者は志願者の種々なる思想を聞きて慰められ

ます、特に其最初の祈の如きは私共に取つて大なる喜であり又奨勵であります。時として其等の人の眞理に就ての美しい考は私共も及ばぬ事があります。又私共は此傳道の事業に於て獻身と祈禱によつて救主と非常に親密な交を結ばしめらるゝ事を得るのであります。

キリストを愛し其民を愛するには勿論苦痛が伴ひます。然しキリストの爲めならば如何なる苦痛も誠に輕く思はるゝ筈であります。事を得るならば如何でせうか、其苦痛は實に大なる榮光となり喜となりますまいか。

教授法の數則

本書に述ぶる所は決して完備せるものでなく唯概略を述べ大體の方針を示したものであります。且つ洗禮志願者にもそれ〴〵差異あるが故、必ずしも同一の方法を以て教授する事は出來ませぬ、此に記す所は全く教師の準備の一助に供するためであります。此材料を實地に用ひて教ふる時に、或る者には平易なる要點のみを抜き取つて教へ、又或る者には此に多少の補足を加へて授くる必要があります。猶は志願者の受洗準備に關しては、長老或は牧師の意向を尋ねて之に從ふ事を勸めます。

要するに生命ある愛に充ちたる思想と卑近の例證とを多く用ふる事が大切であります。特に基督教の貴重なる教義を志願者の實際の問題即ち其の人の陷り易き誘惑及び日常生活の事に相關連せしめて

授くる事は常に肝要なる事であります。

教授の主題

志願者が受洗前に特別に研究すべき事。

(一)公會問答即ち使徒信經、十誡、主の祈禱、聖奠、洗禮の三の約束、洗禮の三の特權。

(二)開闢、人間の墮落及洪水、アブラハムと撰民。

(三)主イエス・キリストの一代記。

(四)聖書の用ひ方。

(五)祈禱書の用ひ方。

(六)聖洗式。

(七)朝夕の祈禱。

(祈禱書中にある公會問答以外の記事に就て此書に充分說明し得ざれば、教師は此等を漏さず教へられん事を勸む)。

本書には、主イエス・キリストの御生涯を研究するの課目を設けませんが、而も主の御生涯を學ぶは洗禮準備の主要なる部分でありますから、志願者をして常に主の聖言を能く記憶させ、主の地上の御生涯と其死と復活とを充分に味はしめん事を望みます。又志願者が教師と共に新約聖書を讀むのみでなく、自身にも之を讀み、少くとも一の福音書に通ずる樣に奬勵せねばなりませぬ。勿論之は理想とする處でありますが、若し充分に讀書力なき者には重要なる聖句を撰んで授けるか又は平易なる國語體に記せる福音物語り類の良きものを撰み讀ましむるが宜しい。又全く本を理解せぬ者に對しては、教師の口授を主とせねばなりませぬ。教師たる者は志願者の思想を働かしむる事を勉め之に思想の材料を與ふる必要があります。抑々キリストの聖言は私共の人間の思想より出づる言よりも更に計り難き大なる活力があります。

本書は志願者が既に多少基督教の智識あるもので、もはやキリスト
に從ふ決心をなし公に洗禮志願者とせられ、造主なる唯一の眞の神を
信じ神佛偶像を拜むを止むる事を誓ひ、キリストの道を明かに學ばん
事を求むる人を敎ふるために記したのであります。其れで私共は此
の志願者の決心を基礎として敎ふるのでありますが、而も最初は其の
基礎は極めて薄弱なものでありますから、一層愛と信仰を深くし、明瞭
確然たる理解を得しむるやう勉めねばなりまぬ。

本書は公會問答を土臺として說きますから、志願者にも聖書と祈禱
書とを持たせ、其使用法をも說明する事が必要であります。

(一)公會問答　公會問答を敎ふる事は少しも興味なき故に甚だ困難
であるといふ苦情を耳にする事があります。然し公會問答は單に概
要だけ書いたもので、敎師が之に裝を添へ例證を附け加ふべきもので、
畢竟宗敎訓育上の最良の基礎に過ぎませぬ。故に其敎課を能く會得
して記憶させるには、是非實際的な普通の事物を例として說明する必
要があります。若し單に之を讀ませ或は聖書の引照を調ぶる位で暗
記させるのであらば或は無趣味でありましょう。本書に載せる引照
は生徒よりも重に敎師のために揭げるのでありまして、準備のため最
も大切な點であります。然れば敎師方は先自ら玩味して後用ひて頂
きたいのであります。此等の引照は初步の者には餘り用ひぬ樣にせ
ねば飽てしまいます。然し其の內に志願者も段々に聖書を能く知り
其用語をも解し、聖句を探すに興味を持つ樣になりませう、其時に至つ
て初めて引照は重要なる訓練となります。

公會問答には種々なる題目を極立派な順序にあげてあります即ち
其處に私共の取る可き主題や要點があります。而も之を取つて造り
上げる事は敎師の手腕にあるのであります。若し是等の題目が敎師

に興味あるならば、習ふ者にも興味あるものとなる筈であります。

教師によつては、十誡の實踐的道徳の方面より説き初め、漸次に信經の崇高なる教理に歩を進める方を善しとせらるゝ方もあります。良心の眠れる人を覺醒し、神に就ける思想の卑きものを教ふる爲には、了解し易き道徳上の教を先きに授くべき場合もありませう。然し最早や眞の神を信じ受洗まで願ひ居る人には、大抵其程度以上に進むで居ますから喜んで信仰箇條の教義を理解する事が出來ます故に、前に記したる順序は最も適當であります。何故なれば基督教の道徳は全く信仰と愛との源泉より溢れ出るのであります。故に此二者が必ずなくてならぬ原動力であります。

以上の如き理由なれば左の順序に基いて教へられん事を勸めます、

(イ)使徒信經――教理と歴史――信仰生涯の基礎。

神が私共の爲め過去に爲し給ふた事、及び今なしつゝ居給ふ事、即神の愛と其働き。

(ロ)十誡――道徳――義務と奉仕の生涯の基礎。

神と人とに對して爲すべき事、即ち神と人とを愛する事と其働き。

(ハ)主禱――禮拜――祈禱の生涯の基礎。

信仰と愛より出る禮拜と密室の祈禱。

(ニ)聖奠(サクラメント)――神の恵――信仰生涯の始めと其の養成。

受洗の理由。

洗禮の三の約束と三の特權。

右の順によれば第一信仰で、第二信仰より出づる働に就て教へるのであります。

(二)求道者自身の思想の働。 良教師は教ふるのみをもて滿足せず、生徒の精神、記憶力、想像力などを働かせ様と致します。知識は教師の腦裡より生徒の腦へ注入さるべきものでなく、生徒自身之を會得せねば

なりませぬ。教師は知識を準備し之を排列し種々の形式によつて生徒の心に提供する事は出來ませう、然し生徒は自ら之に注意し自ら之を觀察し、自ら之に就て推理する等せねばなりませぬ。キリスト教は思想――知識ある信仰を要求するものであります。然し私共が教ふる人々の中には宗教上の問題に就て明確に思ひ廻らし、其思想を發表する事に慣れぬ者もありますから、斯る人に對して只だ此方よりつぎ込むのみにては却て先方を不解のまゝに過さしむる虞ある事たび〳〵であります。若し斯る方法を取るならば、其大半は忘れ果てゝ、決して深い、確い、知識ある信者とする事は出來ますまい。

然れども、教師は斯る人を餘り心配せしめ、又は學校生徒を取扱ふが如くにしてはなりませぬ。私共も皆眞理を索むるもので等しくキリストの弟子でありますから、柔しく謙遜を以て教へるはずであります。

(三)教育ある人　思想上の訓練を受けて了解の速なる、知識慾の盛な

現代の高等教育を受けた婦人には、出來得るだけ自ら研究して疑を質問する樣に奬勵する事が大切で、先方でも必ず之を喜ぶでありませう。斯る人には自ら準備する事が大なる樂みであり、又他人より信仰の緣由を尋ねらるゝ機に明白に答をなし得る樣證據を求むるでありませう。讀書家や思索家は內外より襲ふ處の懷疑や煩悶に逢遇するのは止むを得ぬ事であります。此の小冊子は勿論證據論でも神學上の論文でもないが、教師は熱心な志願者に大著述家と其深き思想を照會する事が非常に興味ある事であります。但し之に就て殊に注意すべき二の點があります。

(イ)必要なきに懷疑や難問を暗示してはなりませぬ。先づ眞理が深く其の心に這入て能く消化せらるゝ樣に勉めねばなりませぬ。

(ロ)徒らに議論を弄んで、活きた愛に充てる信仰を破壞してはなりませぬ。兎に角主に對する初の愛は出來るだけ撫育せねば生長せぬも

のであります。

(四)無教育の人と老人　教師は悟りの鈍い老人や無教育な人なぞに對しては、特に忍耐をもて出來得る丈け親切に了解し易く教へ又必要あらば幾度も之を繰り返して說き聞せ、充分に眞理を會得する迄は言語を變へ、方法を違へて教へねばなりませぬ。斯る種類の人々には書物を讀ひとか、物事を腦裡に記憶するとか云ふ事は實際困難な事であるから、充分に同情を表さねばなりませぬ。教を說く私共には永遠の昔より定まつて居る神の眞理や、キリスト教に於て用ふる言語等は能く見慣れ聞き慣れて居るから何とも思ひませんが、始めて此教理を學ぶ者には新らしく不思議に思はるゝのであります。其故成るべく最初は普通の能く解し易い言語や例證を用ひ、餘り馴れない西洋の話や比喩等を用ひぬ方が宜しいと思ひます。年老た婦人には教へても徒勞であるなどゝ決して思ふてはなりませぬ。私共が考ふるよりも餘程よく了解し、非常に熱心な信仰に進む人が屢々ありますから、斯様な老人には特に力を盡し、如何なる勞をも惜まず導かねばなりませぬ。

志願者が常に活る信仰を持つて居りますれば、縱令勝れし頭腦や確實の記憶が有りませんでも、己が救を全うして美しき生涯に進み、而も人の靈魂を神に導く事さへも不可能ではありません。

(五)測る事能はざるキリストの富　普通教育に於ての如く、心靈の教育上にも順序と階段は最も大切であります。唯だ僅かの眞理をわきまへたる人や初歩の人に、祈禱や感話等を無理に強ふるは、反つて多くの場合其信仰の進歩を妨ぐる事あるをおぼへて、注意せねばなりませんが、同時に機を見て出來得るだけ早く、神に屬る一層深い靈の知識に導き進め「キリストの測る可らざる富」を知らしめねばなりませぬ。

萬ての思想を常に教の基に集中せしむる樣務む可き事は申す迄もありますんが、然し又常に逡巡して唯基の事にのみ氣を奪はるゝも宜

しからぬ事であります。私共自身の經驗によるも、己が心靈上の師と
して尊敬し居る人が唯要點の說明ばかりして一層進んだ深い敎を說
かず、期待した程富豐な敎の奧義を述べないときは、如何程失望したか
分りませぬ。

主は御弟子に、御弟子は又初代の甚だ不充分な信徒に、貴き默示と奧
義を傳ふる事を委ねられました。其故私共も聖靈の御導きを祈り乍
ら、自分の會得した眞理即ち神より受けた恩惠のうちの最も良き物を
豐かに人にも與へねばなりませぬ。度々私共は自分の心靈の如何に
も乏しいのを歎きますが、若し神の寶庫の戶口にて祈り、待ち望みます
ならば、神は敎師及び志願者のため必ず戶を開きて、寶を豐かに與へ給
ふ事を信じます。

(七)古の聖人の敎師に對するすゝめ　第十三世紀に居りました聖ト
マス・アキナスは凡ての敎師の備へて居らねばならぬ五つの德を擧げ
ました、即ち思想の明瞭なる事、簡潔なる事、有益なる事、優雅なる事、及び
深遠なる事であります。私共は之を記憶して守りたいものであります。

(八)新しき悳と思想　敎師は稽古毎に必ず新しく準備をなし、舊い定り
切つた思想や說明の方法を繰返す樣な怠惰の習慣に陷つてはなりま
せぬ。之は特に長らく働いて居る舊い傳道者の陷り易い事であります。
多く無趣味で機械的で活氣のない敎の原因は大抵之であります、
其故敎師たる者は、時節に應じて新しい花を開き新しい果實を結び得
る爲に朝毎に神の御惠の露を蒙る樣祈り求むる事が必要であります。
敎師は其敎ゆる課程に就て實際敎ふるよりも一層深く知つて居らね
ばなりませぬ。私共は聖書や赤禱書に就て唯淺薄な而も平凡な考へ
のみで滿足して居る事が往々ありませんでしようか。私共は勿論何
よりも先きに聖句聖言を研究し、次に他の書籍でも聖句の說明や例證

となるものは進んで研究せねばなりませぬ。研究を重ぬるに從つて私共の思想は刺激せられ、精神は鋭敏となり、感受力は增大し、不意の出來事にも火急の質問にも多少餘裕ある準備も出來る樣になります。私共は人を敎ふるとは云へ、尙凡ての點に於て心靈敎育上初步の者でありまず、而も神は私共を用ひて互に相助けしめて私共の心を廣く高く又深く引き出し給ふのであります。其故智力と靈性の事を極端に區別せず例へば聖書以外の書籍は何によらず之を排斥するが如き考へに捉はれず、靈能才智二つ乍らを神の御用と人の需要のために捧げて働かしたいものであります。

志願者の準備と心得

（一）準備の必要　凡そ人生の大事には必ず準備を要するもので、何人も意識的無意識的に準備せられて居るのであります。例へば家庭の生活、母の訓育學校敎育等は皆一つの大なる準備であります。其の通りに洗禮に就ても十分の準備が必要であることは勿論であります。「神の御子にいまして完全無缺なるキリストも、其生涯の中三十年間を三年半の地上の御傳道の準備となし給ふたのみならず、救世の御事業を御開始なさる前に四十日四十夜の斷食と祈禱とを以て特に大準備をなされたのであります。」私共が眞の神を知り之を愛するに至る遠き以前より、神は夙に私共を知り又愛し給ふて、種々なる方法と手段を用ひて御招きの聲を聞かせんと爲したまふのであります。この大聖旨を悟つて私共の過去の「生涯、及び樣々の經驗、例へば喜憂疑惑恐怖や

約翰壹四〇一九
耶利米亞三一〇廿一
以弗所一〇四

路加一〇七八、七九

哥林多後五〇十四、十五、十七

幼き時日曜學校に導びかれた事、初めて福音の話を聞いた事等考ふれば、是れ皆確かに神が私共を御側に招き給ふ爲めの準備であつて、知らず識らずの中に神の御救に預かる準備を受けつゝあつた事を明らかに知るのであります。斯く前に神を知らず、神を愛せず、たゞ罪の内に惡しき我儘な生活をなした者が、今神の招きを受け、主の御光によりて聖書に謂へる如く、幽暗き心を照され、平康なる路にその生涯を導びかれるのであります。「さらば洗禮志願者は、やがて主を信ずるに由り其過去の凡ての罪を赦され、舊き生涯と罪惡を離れ、神の御助に由り新なる生涯に入る徴として洗禮を受けて聖き御名に入れられ、主の聖なる教會の兵卒又僕婢として公に錄さるゝ最も大切な場合に臨むのでありますから、特別なる準備が必要である事は云ふ迄もありません。」

(二)教材と順序

(注意)先づ受洗志願者をして能く其爲すべき準備を考へしめ然る後、

馬可傳一〇十五 使徒行傳二〇三八

約翰十四〇二六

約百記卅六〇二二

公會問答を見せしむべし。

洗禮準備に於て授くべき教訓と其順序を左に略述致しませう。

(イ)悔改と信仰の必要なる事　誠心より深く悔改め、且つ篤き信仰を得るには、キリストの御弟子となり、主の聖靈によりて直接に教へられ、益益深く神の聖なることゝ自己の罪深く汚れたる者であることを知る樣に努めしめ、洗禮準備の間は特別に主の御導きを戴く樣、常に心懸けしむる事が肝要であります。

(ロ)神の爲し給ふ御働　前に述べたる大切なる教を學ぶに當り、其の準備を爲す者は教師であるか志願者自身であるか、はた誰であるかと云ふに、若し普通の種々の試驗準備の如く、讀書とか暗記とかの事のみならば自身にて準備し、教師の助力を仰いだばかりでも出來るなれども、是は遙かに深い高い心靈上の事であるから、先づ神が働き給はねば何事も出來ません。神は即ち最大の教師でありまして、唯だ神のみが衷

約翰傳十四〇廿六十六〇十三、四雅各書一〇五、三〇十七

來十二七一〇

心より罪を悲しむ心を起させ給ひ、世界萬民の爲め十字架上に死に、又榮光ある復活をなし給ふた主を信ずる信仰を得させ給ひ、且つ罪に打勝つ力を與へて終り迄忠實に神に事ふることを得させ給ふことを深く知らしめねばなりません。

(八)受洗者の爲すべき務　神が受洗者の心に働き洗禮に對する大切なる準備を爲し給ふと同時に、受洗者自らも爲すべき務あることを悟らしめねばなりません。即ち唯に斯る準備の集會に列するばかりでなく、日々家庭又は其の他の處に於ても眞面目なる言行を爲し、たとへ日常普通の働をなす時にも、神の祝福を受くるに適はしき心を持ち、見えざる神を見るが如く、凡ての言行動作を愼む樣に心懸けしむる事。克己して日曜日を守る樣敎ふる事。家庭の務(子供や病人に對する義務の如きもの)を等閑にする事なくして出來る丈け、規則正しく敎會に出席せしむる事。若し出席する事を得ざる場合には(未信者の家庭又は

留守居なき爲め)家庭にありて神を覺え、神が道を開き給ふ迄祈りつゝ待たしむる事を力めねばなりません。

(二)讀書に就ては出來る丈け良書を讀ましむる事。惡小說、新聞の三面記事、其他信仰の妨げとなる樣なものは讀ましむる樣注意を與ふる事。

右の外志願者は出來る丈け、良友を撰みて之と交はり、又自分の家庭にありて可成家族を助け、其喜びとなり、愛の行爲と深切なる言葉により、勉めて己が家族を主に導く樣心懸ける事等を敎ふるは大切であります。

(三)日々の生活。

(イ)私禱に就て。祈禱は成るだけ朝夕怠たらず爲さしむること(此點に就き志願者の實行し居るや否を確むるは必要なり)。簡短なる祈禱文を與へて用ひしめる事。主禱文を用ひる心得を敎ふる事。自己の思想を言ひ顯はして祈る樣奬勵すること。願ひ求むる事のみでなく、感

謝をも捧げしむる事。自己の爲に祈ると共に他人の爲めにも祈らしむる事。敬虔と謙遜を以て祈る樣教ふる事。食前食後に感謝を爲さしむる事。

(ロ)聖書を讀む事に就いて。之に就き丁寧に指導して特別なる個處を定めて研究せしむる事。(眼の惡き人若しくは無教育なる人は除く)。祈禱書にある聖書の日課は洗禮志願者の爲めに初は少しく長きに過ぐれば、他の方法を用ひて必ず聖書の幾分づゝにても讀む事を奬勵する事。路加傳は婦人の爲め特によろしき書なれば之れを薦める事。一の定まつた目的を以て聖書を讀むやう教ふる事(例へば神に就て猶一層深く學ばん爲め又はキリストの御働に就き、或は罪、愛、自らの行爲等に就き研究させる事)。聖書の研究は常に祈禱を以て始め祈禱を以て終る樣なさしむること。感じたる處や了解し得ざる處に記號を附せしむる事。不審の個處を質さしむる事。引照を用ひること。聖句を暗誦せしむる事。これ等は皆聖書研究に興味を持たしめ益々上達せしむる方法であります。

(ハ)教會の禮拜に就て。教會は禮拜及び教訓の中心であると云ふ觀念を充分深く與ふる事。志願者を一々牧師に紹介し、之を熟知せらるゝ樣勉むる事。志願者に教會に能く出席する事を奬勵せねばなりません。

使徒信經

信仰告白には使徒信經が唯一のものであります。先づ手短かに其効用を擧れば。

(イ)使徒等の時代より現代に迄傳へられた貴重な遺産で、現代の私共より子孫永劫に傳へ殘すべき永遠の眞理の說明であります。

(ロ)福音を美妙に簡短に述べたものであります。

(ハ)信條を明白確實ならしめ、又之が忘却誤解せらるゝを防ぎ、諸の誤謬を起す憂なからしむるものであります。

(ニ)個人祈禱の大なる助として聖徒の心を鼓舞し、神の愛と主の豊富なる惠ある聖行を記憶し、感謝の念を起させるに必要であります。

(ホ)公禮拜に於て凡ての信者の共同の信仰告白として貴重なるものであります。

私共は洗禮式に於て之を使用する所以は、主が御在世の時何か大なる働を爲し給ふ前に、毎に其人に「汝之を信ずるや」と仰せられしに則り、此最も貴き聖奠にあづかるに當つて

(甲)正しき信仰を懷ける事。

(乙)其信仰を現す勇氣のある事。

を示す爲めであります。

〇榮光ある絶大唯一の神

【敎授の要旨】求道者をして神に就き崇高なる觀念を懷かしめ、敬神の念をもて神に近かしむ。

信者の中にすらも、神に就ての觀念は幼稚にして甚だ低く、漠然であり又具體的である事を屢々認めます。此等が大抵信仰の墮落又は退歩の原因となつて居る樣に思はれます。

神の至尊、至大に在す事を認めずして、唯だ自己の娯樂の爲めに信じ、然して己が都合に任せて自由に其信仰を取捨する人もありますが、此は神に對して此上もなき不敬に當るのであります。

【一】神は唯一であります。

世の人をざつと區別すれば左の三種類に分ける事が出來ます。

(イ)多神を奉ずる者——日本に用ふる「神」と云ふ意義の通り、何によらず己より超越したるもの、特に不思議なる者、恐るべき者、有用なる者等を、何れの國に於ても祭る事があります(各國殊に日本固有の例證を引き說明すべし、日月、星辰、山川、樹木、風火、雷電、其外獸類の如きものより進んでは偉大なる人物、名譽ある祖先の例等)。又不完全なる人間が己に等しき他の不完全なる人々を崇拜して居るのを常に見聞する事であります。キリスト信者にても英雄をば英雄として尊敬し、積善の人、正義の士、或は己が祖先の如きも、それ〴〵君國に仕へて種々なる働をせら

詩十四〇一、十〇四

羅馬一〇廿八

れし功績を思ひて、其人を偲び、其德を慕ひて、其を模範とする事に於ては他の何人にも劣らず勉むる者でありますが、今日私共の急務とする處は、最善最高の唯一の眞の神に對する世人の觀念を一層純潔高尙に導き上げるにあると思ひます。

(ロ)無神論者＝古今を通じて此の種の人々は常に多くあります、或る者は大膽にも神の存在を拒み、或る者は單に之を疑ひ、之に就て惑ふのであります。斯く無神論を稱へるにも諸の理由がありまして、或る者は無頓着不注意であるが爲めに神を認むる事出來ず、或る者は此の世の事業や快樂や苦勞のため心を奪はれ、不知不識のうちに神を忘却し、又或る者は自好んで罪惡の奴隷となり居るが爲めに、常に世の人の行爲を注目し罪惡を憎みて之を責め給ふ神の存在し給ふ事を考ふるを避け、更に思ひ起さない樣にと希ふのであります。又人に由りては自分が絕對に服從せなげればならぬもの、即ち己以上の權威あるものゝ

申命記四〇卅五
以賽亞四十四〇六、八

存在を肯んぜず、此の宇宙間最高の權力は人間の物であるかの樣に考へ、何によらず自他の者に依賴する事は婦人小兒や弱者のする事であると誤解せる高慢のものもあります。實に神なき人、希望なき人の心の寂寞と其の心靈の危難は幾ばかりでありませう。聖書中最悲慘なる言の一は、以弗所二〇十二にあるパウロの申した『希望なく又世にありて神なき者』であります。

(若し志願者が斯る事に就き說明を要する人ならば、此の場合に現代の思想に伴ふ特別なる危險と、汎神教や不可思議論等に就き一言するは實に好機會でありませう)。

(ハ)唯一の神を信ずる者＝之は即ちキリスト敎徒の信仰する處で、同時にキリスト敎の前驅なるユダヤ敎は素より、又後にユダヤ敎、及キリスト敎の感化によりて起つた回々敎徒も同じであります。舊新約全體を通じてこの唯一の眞神を敎へ、舊約には極めて壯大に且つ熱心に之を敎示してあります。以賽亞四十五〇二一、二二等を見れば、此の眞

約十七〇三
出埃及記廿〇三

馬可十二〇二八—三十
哥林多前八〇四—六
提摩太前二〇五

希伯來十一〇六
詩六三〇一

理は確かに神がユダヤ國民を通じて最も早く人類に與へ給ふた大敎訓の一であつた事が知れます。十誡の中に於ても第一に此敎が記されてあります。主イエスも此舊約の敎訓を確認し、之を以て御敎の基礎とし給ひました。

神の存在を疑ふ人々に對し、聖書中にある神の御默示の外に、自然界と、良心の働と、歷史上の事實と、一般の宗敎心と、心の奧底の缺乏等に基く證據をも立てる事が出來ます。然し一度活る神を眞に仰ぎ奉り、畏くも之に接觸した經驗のある人には再び神の存在を疑ふ事が出來なくなります。恰も子供が自分の唯一の父を知り之に孝養を盡す如く、或は家族の人々が其の家の主人に信賴して其命に從ふが如く、將た又國民が君主を仰いで忠義を盡すが如くに、世界の人類は各人皆唯一の眞神を伏し拜むは當然その爲すべきの義務であり、また最上の喜悅であります。

約翰四〇二四

撒母耳前五〇十一
以士喇七〇九
約百記十九〇廿一
馬可十六〇十八
詩篇卅三〇十八
哈巴谷一〇十三
約翰一〇十八
テモテ前六〇十六

注意　神の唯一に在ます事は十誡其他に度々顯はれてあります。

【二】神は靈であります——私共人類は心靈と物質とを兼ね備へて、物質界にも靈界にも屬して居ます、此靈肉兩方ともに神の賜で何れも貴重なるものなれど、靈の方が肉の上にありて肉を支配し、肉を指導するものであります。人にこの靈あればこそ、靈なる神を了解し之と交る事が出來るのであります。聖書殊に舊約には神は恰も私共人類と等しき御方であるかの如く『神の手』とか『神の眼』とか云ふ形容を用ひてありますが、之はたゞ人に擬へたに過ぎないので、人間の言葉を離れては其眞理を發表したり了解したりする適當な道がないからであります。神は靈なれば人の肉眼を以て見る事は出來ませぬ。而して私共人間にも見えざる靈がありますから、あながち神と人との交際に形體の必要はありませぬ。とは云へ、或る時機と場合に於ては己を人に顯はし給ふ事もありました。特にキリストに於て受肉降誕し給

ふたのは其顯著なるものであります。

【三】神は自存し給ふ御方てあります。 人は人に賴ずしては、一日も過す事は出來ませぬ、まして神の御祐護と御補助がなくんば生を保つ事だに能はぬものであります。例へば小供は其兩親に、病める者は醫師に、子弟は敎師に、老人弱者は壯者と强者に賴らねばなりませぬ。社會も國家も亦同樣であります。然れど神のみは獨立にて自存し給ひます。神は何人何者の助をも要せず、人の信仰によりて其の存在を維持し給はず、反て希伯來一〇三にある如く森羅萬象を支持し給ひます。

【四】神は不變不朽てあります。 世の中のものは凡て永久的でない、(衣は破れ、食物は腐敗し山でも風雨によりて形を變ず)又一方より考ふれば、絶えず進步發達する、(蕾は花となり、花は果實となる、また兒童も成長發達する)其が爲めに變化は必要であります。然し神は完全無缺の方に在し給ふ故に素より變化の必要はありませぬ。

希伯來十三〇八 詩九十〇 二 提摩太前六〇十六

人の生命は蜉蝣の如く五十年或は七十年を長しとし、終に死と云ふ最大の變化に遭遇するものであります。而し神のみは死の束縛を受け給ひませぬ、舊約中にある「エホバ」てふ聖名は此意味を含む言葉であります。其外「永遠より永遠まで汝は神なり」、「獨一死なざるもの」等と記され、主イエス・キリストは神に在し給ふ故に「昨日も今日も永遠まで も變らざるなり」とあるのは、皆神の不變を證明するものであります。此の世の王者は順次に世嗣によりて位を繼紹されますが、神は永遠無窮に在しませば、其の聖代は絶ゆる事がありません。されば主禱の終りにも「國も權も榮も世々に父のものなればなり」と唱へ、又敎會の禮拜に於て萬ての頌を唱へる時必ず「始にあり今あり世々限りなく在るなり」と附加へるのであります。而して曾に口に之を唱ふるのみでなく眞に之等の言葉の深意を心に理解しますならば、私共の信ずる神の如何ばかり偉大に在すかを感じて歎稱するの外ないでありませう。

以賽亞四三〇十 詩一〇四十五 十三

詩篇百卅九〇七―十二

【五】神は遍在し給ふのであります。 不完全なる肉體を備へたる私共人間は時間空間に支配せらるゝ者でありますが、神に於ては何等斯る法則に束縛せられ給ひませぬ。われらは海の東西何れに至るとも、この世に於ても後の世に於ても、或は旅して星の世界に行きましても、何處如何なる處でも凡て神の聖國の中でありますから、同じ樣にこの遍在し給ふ神を拜し得るのであります。詩百卅九〇一―十二は實に能く此事を言ひ顯はしてあります（阿彌陀佛を信ずる者の稱ふる西方極樂淨土の如き異なる神々によりて治めらるゝ特別の世界は全く無いもので、全能なる唯一の神が凡ての處を治め給ふのであります）。

詩篇廿三〇四以賽亞四十三（二

神が何處にも在し給ふ事は、或人に取つては恐れ怖くべき事でありましようが、神を愛し神と全き平和の內に交る者には之が何より喜ばしい事であります、何處如何なる場合にも常に神の目前にあると確信して居さへすれば、罪の誘惑に打勝つ勇氣と力を得孤獨寂寞の生涯にも豐かな慰を得る事が出來まして、此世は實に天國の庭の如き處となります。

羅馬十一〇卅三詩百卅九〇一―五

【六】神の智と識は完全であります

其の智識に窮りなく其の力に限りがありませぬ神は宇宙間の過去現在未來に於ける凡てに就て知り給ひますけれども、最も大切の事として敎ふべきは神と求道者との關係に就て例證する事であります。

結十一〇五來四〇十三

求道者の今迄神を慕ひ求めた心、凡ての行爲、家庭の有樣、子女の育て方、交際上の事及び外の働も內の考へも、父母兄弟、親友等の知らない秘密でさへ、神は愛と同情とを以て聖心に止めて居給ひます。然れば私

約翰廿一 〇一七

共もペテロと同じく「主知らざる處なし、爾を愛する事は爾しれり」と神に對して言ふ事を得ば如何に幸福でありませう。

約百記四十二〇二

【六】神は全能であります。

信經の第一節にある『全能』と云ふ言の意味は『絶體の權威ある』と云ふ事で、提摩太前六〇十五、十六に『獨一の權威ある者諸々の王の王、諸々の主の主』とあると同樣の意味であります。

エレミヤ廿二〇一 同廿二〇 廿七

一家の主婦は自分の家庭といふ小天地にて、船長はその船内にて、一國の皇帝はその版圖内において、大なる權力を揮ひて支配して居ります。斯る力を與へ給ひし神は、遙かに大に在まして宇宙の權威を其の掌中に握り、高きは日、月、星辰より、低きは濱の眞砂に至るまで統べ治め給ふのであります。

此の特性も聖書中に於ける土臺的思想であつて、預言者エレミヤの祈禱の言、及び其に對する神の御答、天使が處女マリアに語りし言、キリスト御自身の聖教などに現れて居ります。殊に詩篇中には作者が此特性の美しさを歌つた歎詠の句で充ちて居ります。

路一〇卅七 可十〇廿七

但し神は或る特別なる目的の爲には、或る點まで御自分の全能力を制限し給ふ事があります(例せば人間に自由意志を與へ自由行動を取らしめ給ふ場合の如し)

歷代志下廿六〇十五、十六 以賽亞五十六〇一 二馬太廿七〇三 默示三〇二十 ヨハ子五〇四十

【八】神は聖なる者であります。

目的――神の圓滿なる至聖の美しさに感動せられて、其を慕ひ且つ喜びて讃頌するに至らせるにあります。

此の思想は舊約聖書中に大なる力を以つて明白に教へられました、即ちモーセの教訓、神殿の構造(至聖所と聖所など)或は禮拜に關する儀式(潔めの例など)又預言者達の教へ等に於て學ぶのであります、此を認識する事は、最も必要なる土臺的教育の要素でありまして求道者には缺くべからざる教訓であります、尙進んで神なるイエス、キリストの御性格によつて此の美しき特性は一層親しく且つ完全に私共に現され

ました、求道者は漸次主の御生涯に就き研究を重ぬるに從ひ、愈々此の點を明かに悟り得るでありませう。

舊約聖書中より例せば、イザヤは天使が「聖なるかな、聖なるかな、聖なる哉」とエホバを讃頌した幻を見て、今更の如くに神の聖なる御榮を拜し、それと共に自分の罪と汚を悟りました。唯にイザヤのみでなく私共も神の清淨無垢なる御性質に觸れる様になり度ものであります、人が潔きに進めば進む程、一層明白に神の潔きを悟り、其れと同時に罪惡を厭惡するの念が增すのであります。故に神を信じ神に近づく人々は、譬へば高き峯の純潔なる白雪が、青葉の上に玉かとまがふ白露の様な神の潔き御性質に則りて各自己れを潔くし、恰も谷間の寢るが如き穩かな湖水が鮮かに四方の景色を寫すが如く、神聖なる神の聖姿を反射する事は私共の切なる願ひであります。

【九】神は愛であります。

寢六〇三
寢五十七
〇十五約
十七〇十
一、廿五、
約第一書
一〇五
默示四
八〇

彼前一〇
十五、十
六

前に私共は神の神聖に就て學びましたが、夫と同時に神の慈悲深く愛に富み給ふ方たる事を悟り得るは、此上もなき慰めと喜悅であります。私共がまだ神を知らざる時より、否生れざる前より既に神の愛は私共の爲めに動き働いて居るのであります、之に就き此所にて詳細に述べませぬが、後に說明する敎義(父なる神、救主とその十字架、及訓慰者なる聖靈など)に由つて明かに現はれますから、志願者は自然に其を實驗する様になりませう。

約翰壹四
〇一九
耶利米亞
三〇一三
以弗一〇
四

父なる神

我は天地の造り主全能の父なる神を信ず

使徒十七〇二八

【教授の要旨】

一、神の廣大なる親心

二、人間が神に對して孝行を盡すべき義務

（使徒信經の「父」と云ふ名稱は、子なるイエス・キリストが、此機を利用して神が人類の父なる事に就ても說明することは適當でありますが神を人類の父と考ふる思想はキリスト以前に於ても全く無かつたのではありません、餘程曖昧でありました。古いギリシャの詩中にも『ゼウスは神々と人々との父』と云ふ言葉があり、又聖徒パウロはアテンスの人に對して『汝等の詩人たちも我等はその裔なりと云ひしが如し』と云ひて、ギリシャの他の詩人の言を引用しました。哲學者等も我が「宇宙の父」と云ふ言を用ひましたが彼等がこの『父』に就ての智識は得難くあつて之を世人に傳ふる事は不可能であると述べました事はウエスコット博士の述べられた言の中にあります。舊約書を見るも出埃及記四〇二二、以賽亞六三〇十六、馬二〇十に『國民の父として』又母後七〇十四には『神を恐るゝ者の憐みある父の如して』詩百三〇十三には『神を恐るゝ者の惠み深き父の如く』と錄されてあります。殆凡ての宗教家は人間が神より其生命を享けて居るとの思想を多少抱いて居りますが然しキリスト信者が神を父と考ふる思想に比較すれば、實に偏狹なものに過ぎないのであります。此微かに認められて居る眞理を明白に世に示し、之を一大中心的眞理としたのは、主イエス・キリスト御自身であつて、主は私共に祈禱の時に神を「父」と呼ぶ事を敎へ、其名稱の深意は肉體の父子の關係よりも遙かに勝つて居る事を說き給ひました。

馬太七〇十一　新約書に父なる神を(一)キリスト御自身の父として、(二)萬人の父として、(三)信ずる者の父として書き顯はしてあります。今この三つに就て考へて見ませう。

路加二〇四九　ニケヤ信經　アタナシオ信經　約翰一〇一一三、一七〇五　約十七〇一、二五　來十二〇九

【一】主イエス・キリストの父――キリストは未だ十二歳の若年にて在した時、既に神と特種の關係を有つことを知り給ひました。キリストは永遠の昔より神の唯一の聖子に在まし、人となり給はざる以前に於て既に子なる神にて在し給ひました。イエスは常に祈禱の時に『父よ』『聖き父よ』『義しき父』と神を呼び給ひました。

【二】萬民の父――使徒行傳十七〇廿八、廿九にも錄れて居る如く、多くの人々は昔より多少此考へを抱いて居りましたに拘はらず、屢其思想を取失ひ、或る者は無宗教となり、他の者は多くの神々があると云ふ觀念に其心を亂されてしまひました。故に眞の父を知らずして孝養を盡さずに居るので、或る意味を以て神の子と稱へられても其資格が御

約翰一〇十二、三十　三〇十七　太五〇一七〇　約一〇十二、三　加拉三〇廿六、廿七

座いませぬ。來十二〇九に於て神は人類のたましひの父と記され、馬太五〇四五を見れば、神は人類を御自分の子であると思召し、惡しき者にも善き者に對すると同樣の愛と恩惠とを以て、雨を降らし、日を照し給ふ事が記してあります。路加十五〇は迷へる世の人に對する父なる神の慈愛を說いたもので、何人にても神に來る者をば凡て迎へ給ふ大なる御心を示したものであります。

【三】信ずる者の父――此關係は實に高潔なもの又幸福な者であります。山上の垂訓中の「汝等の父」と云ふ言葉は弟子に向つて用ひ給ひましたのであります。而して私共が「神の子供」となり其の凡ての特權を得るには如何にすべきかを知らんと欲せば、左の條件を知る必要があります。即ち『彼を受け其名を信せし者には權を給ひて之を神の子となせり』『汝等は皆キリスト・イエスを信ずるに由りて神の子となれり。そは凡てバプテスマを受てキリストに入れる汝等は、キリストを衣た

約翰十四〇六

彼得前三〇十八

加拉四〇四―七

以弗一〇五、六

る者なればなり』と云へる聖句中に含まれてある三要點であります。

(甲)キリストを信じで心に主を受入れる事。

(乙)神の聖なる家族に入れらるゝ式なるバプテスマを受ける事。

(公會問答に「洗禮を受けて……神の子と……せられたり」とあり)

(丙)キリストと一致する事。

キリストは受肉降誕と贖罪の死により、私共の如き罪に汚れた賤き者すら聖なる神の子となり得る様に道を開き給ひました。キリストは『人若し我に由らざれば父の處に行く事能はず』と仰せられ、又ペテロはキリストの苦しみを受け死に給ひし事に就き錄して『是我等を引きて神に至らんとてなり』と言ひました。キリスト・イエスの御降誕の目的は罪より我らを贖ひて『吾等をして神の子たる事を得しめんがため』であります。

洗禮を受ける時に此の子たる特權は明白に保證せられます。此の

羅馬八〇十四―十七

使徒行傳十七〇廿五

名譽ある地位に立つ事を許された私共は、如何にして之に適はしき生涯を送る事が出來ませうかと云ふに、聖靈の御祐助による外はありません。聖靈は私共各自に神を愛敬する念、神をアバ父と呼ぶ子たる者の靈を賜ふのであります。「アバ」即ち父と云ふこのアラマイック語は現にキリスト御自身によりて用ひられた語であります。

「天の父」といふ聖名に包含せる教訓

【一】生命を與へ給ふ事。 吾人の存在し居る事も、各自の有る力や、あらゆる善き物も、凡て神の與へ給ひしものであります、兩親の恩は山より高く海よりも深しといはるゝ程大なるものでありますが、神の恩惠は遙かに夫よりも勝つて居ります、子供は肉身の親のものである如く、吾等人類は神に屬するものであります。

【二】我らに必要な品を凡て備へ給ふ事。 良き父は己が子供に細心の注意を拂つて之を育てます、生活上の事は云ふに及ばず、彼等に敎育を

施す事、及び將來の計畫に至るまで豫想し、其準備としては骨身を惜まずして働きます、其れと同樣に父なる神も愛を以て私共人類を敎育し靈肉の爲めに必要なる凡ての物を備へ、神に逆らはざる人々の爲めに善き賜を豐かに降し給ひます。

賽六十六〇十三　使十〇廿四、廿五　羅八〇廿二

【三】深く愛し給ふ事。

(イ)聖書中には父殊に母が幼き子供に忍耐を以て柔しく可愛がる其愛に比べて記されてあります。

(ロ)良き親はたとひ子供が大勢ありましても、平等に之を愛して一人々々を重んじます、之と同樣に人が此世に生れた以上、神の愛に洩れる者は一人もありません。兩親が低能なる兒に就ても容易に失望せぬ樣に、神は如何なる人々にも同じ御心を現はして夫々に訓育し給ひ、決して輕しめ給ひません。

(ハ)兩親は子供の爲めには如何なる犧牲をも厭ひません、之れも神の

親心が幾分反射されたものであります。

(ニ)神の愛は父の愛より先だつもので、幼き子供が未だ母の愛を悟り得ぬ內より母によりて愛せられて居る如く、吾等も神の愛を知らざる前より神に愛せられて居るのであります。

(ホ)神の愛は又個人的の愛であつて、一人の靈魂の價は馬太傳十八章或ひは加拉太二章廿節の「我を愛し吾が爲め云々」なぞで悟る事が出來ます。

約四〇十十九　希伯來十二〇五—十一　ロマ五〇三—五　同八〇廿八　馬太五〇四

【四】愛して懲しめ給ふ事。 子供をあまえかす事は眞實の愛ではありません。氣隨氣儘に育てた子供は長じて後に善く之を躾ける事が困難でありますから、終には不孝者となりませう、私共は終生神よりの試練を頂き得る事は此上なき幸福であります、困難苦痛に會する時に之を前世の因緣とか祟りとか思つてはなりません、種々なる痛苦の內には神の愛の敎訓が含んで居るのであります。

馬拉一〇
六
主ノ新禱

【五】天父に孝順を盡すべき事。 天の神が實際に吾等の親に在し給ふなれば子たる私共は神に對し孝順の義務を盡す可きは當然であります、父母に孝行を盡す事は子供に取りて大切の義務であり大なる喜びであります、然るに私共は神に對して此の重大なる義務を果さずして之を等閑に附して居るとは抑如何なる故でありませうか。

天地創造　創世記第一章

【教授の要旨】森羅萬象の宏大壯嚴なる美はしさによつて我々をして創造主なる神を一入深く崇拜し、天然自然の美を眺むる毎に、清き喜に滿ちて感謝する念を振ひ起させる事。

天地創造に就て教ふる事は最も樂しき事であります。(讀むに困難を感じない求道者なれば先づ創世記第一章を共に讀まれん事をすゝむ)少し教育ある婦人は科學的疑問を起して質問する事がありませう、併し之は決して恐るべき事ではありませぬ。若し始めより正しく說明せば求道者は餘計の煩悶を抱かない筈であります。

(此の後の記事は重に教師の參考でありますから適當に引用して教へらるゝ事を望みます)

【一】萬物は神により創造せられた事。

宇宙に充てる萬の物は、見ゆるものも見えざる物も、皆眞善美を備へ給ふた三位一體の神の偉大なる慈愛の御心を以て案出し創造し給ふたものであります。

世界の創造に就て諸國々の昔の本(例へば古事記なぞ)には隨分奇怪なる物語が錄されてありますが、創世記には最も簡單にして嚴肅なる記事があります。即ち萬物は神の聖言、換言すれば神の貴き聖旨によりて創造せられた事を示してあります。之に依つて私共人類は此世界にて誇るべき高貴なる起原を持つてをる尊いものである事を明瞭に悟るのであります。神が宇宙の萬物を創造し給ふたと云へば、即ち

創一〇一
使十七〇
廿四
以弗三〇
九羅四一〇
十六
來約一一〇〇
二三
默四〇十
一
詩三三〇
六九
來十三
一〇

その文字の示す如く無より生命を造出し給ふた事で、創世記第一章一節に天地を創造し給ふたと云ふ處に此文字が用ひられ、次に廿一節に動物の生命(即ち根本的新事實)の創造の時に用ひられ、又廿七節に更に進んで神の像に形どり精神と靈魂とを備へたる人間の創造せられたる場合(即ち一層空前の新事實)に用ひられてあります。

【二】創造の時代は聖書に唯だ『元始』とあるのみなれば、何萬何億年を經過したか明確に其年代を知る事は出來ませぬ。此の地球も中々に古い物でありませうが、之よりも更に古い物が宇宙間にあるか知れないのであります。

【三】創造に要した時間に就ては、一週間の如く錄してありますが、是は今日私共が稱へて居る十二時間とか二十四時間とかを一日として考へる必要はありません。創世記第二章四節を見ると萬物が創造せられた凡ての時間をまとめて一日の如くに錄してあります。英語にて

もヘブル語にても『日』と云ふ言を用ひて『時代』を顯はすは極普通であります。年月の計算の如きは、神の思と人の思と大なる差がある樣に思はれます。世界を即座に創造し給ふのが神の聖旨であつたならば、一瞬時に是を爲し給ふも敢て怪しむに足りませぬ。然し神は深き御思召を以て多分幾千幾萬年をかけて、徐々と創造する事を善しとし給ふたのであります。

【四】創造の順序は見事に配置せられ、凡てが完全なる計畫に基ゐて始めより一歩〳〵進歩發達する樣に仕組み給ひ、最後に萬物の靈長たる人を創造し給ひましたが、其人も又次第に向上進歩する樣に造られたのであります。然して其受造物の宏大美妙なる事は實に驚くばかりで、仰いでは日月や無數の星(肉眼では殆ど六千の星)が見え、大きな望遠鏡では億以上を見る事が出來ますが、其外にまだ如何程澤山の星があるか知る事は出來ませぬ。地球より一番近い恒星への距離は太陽へ

の距離即ち九千百萬哩の五十萬倍以上あります、此等は各々一の太陽で多分丁度私共の住める此地球が一つの太陽に附隨して居る通り是等の數限りも無き太陽も各々其れに伴ふ遊星を持つて居るのであります。ある天文學者の説によると、今日に於ても猶多くの星が新に造られつゝあるとの事であります。

傳道書三〇十一　雅一〇十七　詩百四〇廿四　詩十九〇一—六　ロマ一〇二十

【五】自然に對する信者の喜び

神の聖手の働きは全きもので、究むれば究むる程不思議に美妙に出來おがつて居ります。

日之出、夕やけ、月夜の美はしき事なぞ、私共信者の爲め特別の深き意味を含んで居ります、多くの人々は美しき日の出を拜しますが私共信者は特別に壯嚴の念に滿され思を天に馳せて太陽の輝きを通して榮光の神を拜し讃美するのであります、又秋の澄める夕に照り輝く銀月を見る事も信者に取つて此上なき喜びであります、之等は神の賜であつて神の聖き美さを現すものであります。

火水、食物、衣服等は云ふに及ばず、彼の電信、電話、電燈、蒸氣、醫藥等を用ひます時にも、此等を神が人間の爲めに備へ給ひし物と認めて感謝する筈であります。

人間の創造

創一〇廿六—廿一、二〇

【教授の要旨】人間の貴き事、神より與へられし特權と其の重ずべき事。

創造の順序は最も卑きより漸次高きにまで進んで造り給ひました、然し受造物の中には未だ神の愛に答へ、神と美しき靈的交りをなす者が何もありませぬ故に、最後に大なる愛をもて御自分と親く交り得る者を作り給ひました、聖父、聖子、聖靈の三位一體の神が如何程の細心と注意を以て人間の創造に力を盡し、外の受造物に勝りて眞善美を備へた る無類のものになさんとし給ふたかは創一〇廿六によつて知られます。神の此上なき尊き聖姿、即ち御性質に似せて造られたる人間の如

何程に尊いもの、價値ある者、善なるものであるかゞ之れで能く分りまず。（善を重んじ惡を憎む良心の働や、記憶力や、又想像によりて美しき物を案出する藝術家の技能や、婦人が家庭を治める才智德性や、子供の天眞爛漫たる心等はすべて神の特質に像られて造られしものたる事の例證として隨意に引用するは宜しと思はる）。實に人間のみ獨一の神と交る大特權を有し、天の聖潔と幸福と榮光とに預り得るために創造せられ、下等動物を支配して其上に君臨せんために地上に置かれた事を思ひ、感謝の念を以て自重自尊し同時に神の前に深き謙遜をもて造主の聖旨に戻らぬ樣務むるのが其本分であり責任である事は明らかでありまず。聖オーガスチンの言に「神よ主は我等を主自らの爲めに造り給ひし故に、我等の心は主に逢ひ奉る迄は平安を得ず」とあるのは誠に眞理であります。偶像敎の人々は往々人を神の高きに引き擧げると云ふよりも寧ろ神を人間の低きに引き下げ、神を人間に似たも

詩篇八〇
詩百〇三
詩五十〇
廿一

のと想像（繪や像やつまらぬ話に於て）する傾向がありまずが私共も此點に就て注意せねばなりませぬ。

（創世記の記者は神の御示導に由って自分の時代よりはるか以前にあつた種々の材料を用ひて本書を編纂致しました。この中にても殊に第一、二章　天地開闢の記事は最古の文學の一つであると認められて居ります。世界の創造に就ての極古き話はニネベ、エヂプト、ギリシヤ其他の諸國にもありますが、然し其の記事の純粹にして壯大なる事は此の創世記の第一、二章に及ぶものは他にないのであります）。

創世記一
二〇二十七
二〇廿一
太十九〇
三—九
來十三〇
四以弗所五
〇廿二—
廿三
彼前三〇
七
テトス二
〇十

人間は男女として造られし事及結婚

神は始めに男を造り次に男の補助として女を造り給ひましたと記してあります、結婚は神によりて此の世界の造られし最初に立てられたる聖式であるから、之を貴重し神聖視すべき筈であります。

キリスト敎に於ては男も女も共に神の子供として貴びますが、或る人々の誤解して居る如く女を男の上に立てる事は決してないのであ

ります。男子には男子の本分あると同時に女子にも女子獨特の本分がある故、男女は互に尊敬し互に助けあひ各其の分を守り、何處迄も純潔の德を守りて『神の敎を飾る事』をせねばなりません。

人類と罪

【要旨】求道者に悟らしむべき事は左の如し

(一)神と人間との交りの美はしく喜ばしき事、および其の交を妨げらるゝは悲しむべき事。

(二)基督敎の「罪」と云ふ言の深意、

(三)罪惡は忌み憎むべき物なる事、

(四)罪を犯すは慈愛深き神の聖旨を痛め奉る事、

(五)靈魂の滅亡の恐るべき事、

(六)救主の必要なる事、

使徒信經には先づ天地を創造し給ひし神の事を記し、其の神が贖主となり給ふた事に就て記してありますが、神の此の二の御働の連絡を悟らしめる事は大切であります。故に信經中人類の墮落に關する記事がありませんでも、此處に犯罪につき敎ふる事は最も好き機會でありますからアダム、エバの話を入れる事は適當でありませう。(求道者が神に對する罪てふ事に就て後程キリストの御苦や十字架の意味に由つて尙深く解するのでありますが、此處で少しくその觀念を起し初める事が出來ます。)此物語は實に大切なる意味に充ちて居りますし聖書の言には大なる力がありますから成るべく聖書其儘に用ひる方が宜しい。之は文字通りの話であるか、太古の人間の經驗した事柄を比喩的に形容して記したものであるか、何れにしても其の裏面には深遠なる意味が潛んで居ります。出來るだけ解し易き言を以て適當の例を考へて求道者の日每の實驗にあてはまる樣、敎へるが肝要であります。

左記の談は教師自身の心備へにとて記せしものなり。

【一】人間の無辜なりし事、また其の意志の自由と道徳的責任。

人は神に似せられ神の性を有たせられた故、素より潔らかに作られました。又同じ理由で意志の自由を備へた者故、從つて善悪を判斷し道徳的責任を持つた者でありました。

【二】必要なる試練。 アダムとエバはもと無辜の者でありました、然し無辜は善の最高なるものではありません。無辜は正義よりも一段低い者でありますから、神は人間が正義に達する事を望み給ひました。無辜とは罪悪の何たるを知らざる試錬なき幼子に屬するもので、正義とは進んで罪悪に遇ひ誘惑を受くる場合に神の恵に由つて之に勝ち得て能く鍛錬した徳を云ふのであります。神は今述べし如く人間に正義を要求し給ひましたが、其前に先づ善悪を識るの智識が必要である故、神は其の意味を以つてエデンの園に善悪を知る樹を置き給ふた事が記されてあります、但し善悪を知るとは神が之を知り給ふと同じ様に悪はたゞ之を見て知るに止まり、決して之に觸るべからざるもの、之を犯さば犯し得るなれども、最も忌み且つ憎むべきものとして知る事を神は人に望み給ふたのであります。この理由を以て神はアダムエバが悪魔の試に逢ふ事を赦し給ふたので、今日と雖も人として此世に生くる者は、皆速かれ遲かれ此試錬に遭遇せねばならぬ運命を有つて居ります。怠惰、不從順、忿怒等の罪を始めとして、あらゆる罪悪の試は人間が善悪何れかを選ぶ機會でありまして、神は此によつて人間の品性を造り上げ給ふのであります。アダムとエバは此試錬を利用せば一層尊貴な品性を受け得るに拘らず、反つて墮落の淵に沈んだのであります。凡て何事に由らず向上進歩の出來得る場合には、必ず又退歩墮落の道が並行して在ります。之が靈的生涯の一大法則で、善に進むも悪に退くも其間危機一髪の差のみであります。故に凡ての誘惑

は品性を造る爲の大なる機會となると同時に、又大なる危險の時であることを忘れてはなりません。

雅一〇十三 約八〇四十四 哥後十一〇三 默十二〇九、二〇

【三】神は云ふ迄もなく罪惡其ものゝ創造者ではありませぬ。 神は罪を犯し給ふ事なく又人をも惡に誘ひ給ひません。

馬太十三〇二八、廿九 彼前五〇八 以弗所六〇十一

【四】惡魔と誘惑。 創世記第三章にアダム、エバを試みるものは蛇であると記してあります、惡魔が狡猾に人を惑はし自分に充ち〳〵たる罪の毒汁を人心に注ぎ込み、巧みに人を罪惡に陷らしむる性質を適切に現はして此の比喩的名稱を用ひたのであります。サタンとは希伯來語にして「敵」を意味す、

種々の罪惡は人間の心より出づるか、祖先より遺傳として受けたのみではない、又外部より來る誘惑に由ると云ふ事はアダム、エバの話や主イエス・キリストの試みられ給ひし事によりて明に悟ることが出來ます。さらば私共は之によりて多大の慰を得、己の惡を省みる時にも

哥後十一〇十四 以六〇十二 約壹三〇八（書三） 約〇十二〇廿一

絶望の淵に陷る事なく、却て惡魔を打伏せる樣奮勵する心を起されるのであります。神と人類の大敵である惡魔は、今も昔と變りなく善惡共に巧みに之を利用して、人の靈魂の滅亡をのみ日夜計つて居るものであります。其智慧も權力も到底人間の及ぶ處でなく、キリストによりて全能なる神をたのむの外、罪より救はるゝ途は無のであります。

約壹二〇十六

【五】アダムとエバの犯した罪は何でありますか。

一、神の聖言を疑ひし事。二、神の愛を疑ひし事。三、亡恩と不滿足の心を起せし事。四、神の法を無視して不從順であつた事。五、神を棄て自己を中心として己を喜ばせた事。六、肉體の慾、眼目の慾、勢力より起る驕傲を慕ひし事。七、神より與へられたる自由を亂用し神を忘れて己が欲する道を選びし事。八、高慢なる好奇心に驅られ神の如きものとならんとして神に逆ひし事。

アダム、エバは右の如く神と等しからん事を求めて、却て眞の自由を

失ひ罪の奴隷の境遇に陷り、智慧からん事を求めて反つて痴愚蒙昧の輩となつて終ひました。些々たる一小悪にても分析すれば斯る諸の大罪悪を含んで居りますから、小悪と雖ども決して輕視してはなりません。

雅一〇十四、十五

【六】**罪悪の增殖。** エバは己が誘はれた後、その夫をまた誘ひました。其れよりは瞬く間に羞恥、恐怖、虚言、罪を人に歸する事等、悪は悪を生んで、遂に最後に悪成つて死を生んだのであります。今日も之と同様に最初の罪を心に許さぬ様努力する事は最も肝要であります。

創三〇十六—廿四

【七】**罪の嚴罰。** (イ)アダムとエバは第一に良心の呵責を受けました。人間は皆自己の内に審判者即ち良心を持つて居りまして、罪を犯せば必ず良心が鐵槌を下し、何處迄も之を呵責して赦さず、善をなせば之を賞して非常なる喜悦を與へます。(ロ)疲勞と悲哀と死とが人類固有の物となりました、(ハ)神と離別いたしました、エデンの樂園より追ひ出され

馬太二五〇三四、四一
創二〇一七
羅馬五〇十二、六—一〇
雅各一二十三—一五

れた事は其意味であります。神に造られた人として、造主なる神と共に居るより大なる喜悦はなく、又其反對に神の聖前より追ひ拂はれる事程大なる苦痛はありません。神は人の生命で在ます故、神より離れる事は取も直さず人間の靈魂の死に外ならぬのであります。

【八】**子孫に及ぼす結果。** 人間の性格は遺傳するもので、今私共が善を爲すは難く惡に陷るは易いのは、幾分か我々人類の祖先が罪を犯し、其が今日迄持續し來た祖先傳來の遺傳によるものであります。されば兩親たる者の責任が如何ばかり重大であるかは、多分御互の想像以上でありませう。

【九】**救主の御約束** 創世記第三章の記事は實に歎ずべきものでありますが、然し一つの望みは十五節に顯はれて居ります。即ち婦の苗裔が蛇の苗裔に戰ひ勝ち、敗者が相手の踵を碎き、勝者は敵の頭を碎く事を預言してあります。抑も婦の苗裔とは何人を指しますか、云ふ迄も

羅馬三〇
二三
以弗所二
〇一—八
約一書一
〇八
歳二十〇
九

なく聖マリヤより生れ給ひし人類の長、代表者たる救主イエス・キリストであります、斯く考へ來ますれば人類の歴史の始めより、天の神は人生を取つて此の世に來り給ふ聖心にて其の準備を人にも行はしめ給ひました、然れば舊約全體の記する事は救主を迎ふる爲の準備であつて、其の內に與へられた救主降臨の御約束も創世記第三章のみなればその意味は不明瞭なれども、其後次第に明かに悟り得る樣に敎へられてあります。

此の世のあらん限り人は皆罪人たる事を免れぬのであります。人は自ら神を離れて罪を犯し、唯だ死と滅亡あるのみでありましたが、愛深き神は捨つべきものをも捨て給はず、死に定まれるものを活さんとて何處までも人を慕ひて之を捕へ、高きと義しきとに導き、遂に其聖子を以て萬民の犧牲となし、全き贖罪の道を開き給ふたのであります。

洪水の話

創世記六章—九章

創六〇十
七同七〇十
九

【敎授の要旨】罪に對する神の正しき怒り。正義のための御熱心。汚されし世界に新起點を與へ給ひし神の深き御惠み。信仰と救との親しき關係。及び方舟(敎會)の比喩の意味を能く悟らしめる事。

舊約聖書は重に世の始より今日に至る迄の世界歴史上に比類なき事件即ち神子の受肉降誕の準備として、神が人類を種々に取扱ひ給ふた事を錄してあります。既に罪てふ要素を受入れたこの世界世界天下等の文字は素より當時人類の住せし小世界の意にして即ちアジヤ洲の一小部分に限る)は日々腐敗と墮落に傾いて來ましたから、遂に神は一大洪水を以て地上を潔め、人間の罪惡を一掃し給ひました。正義の壇上には如何なる犧牲をも惜み給はぬ神は、其細心なる御注意と幾千幾萬の長年月を費して創造し給ふた人類に、其使命を行ふ場所として與へ給ふた世界を一朝滅亡に歸せしむる事をさへ必要あれば善しとし給ふたのであります。之に就き聖書中にある多くの實例中、其顯

著なるものはキリストの十字架より外にありませぬ。神は愛に充ち給へども必要の場合にはあらゆる苦痛を人の上に降す事を否み給はぬのみならず、神御自身が先づ最大苦痛を忍びて、自ら世に降り、罪のため十字架の恥と苦難をさへ忍び、一時その貴き聖體を死の中に臥せ給ふた程正義の確立を重じ給ふたのであります。今日の基督敎徒は動もすれば惡に對して寛に過ぐるの憂あれば勉めて神が眞心より善を好み惡を憎み給ふ事を志願者に說き聞す事が肝要であります。

ノア時代の洪水の目的は人を滅す爲でなく、正義の種のみを救出さんが爲でありました。淵の源皆潰れ、天の戸開けて四十日四十夜の大雨が起つた時に、神を信じ神に服從した一家族のみが大なる方舟の中に其生命を全うする事を得ました。此の事實は例証として洗禮式文中に記されてあります、これは即ちキリストの公會なる救の方舟によりて世の難みと罪の滅亡の中より救はれることであります。方舟の中の一家族が神の御守の下に平和と安全を得ました如く、私共も眞實に靈と眞とを以て神の敎會に連つて居りますならば、キリストの御功績によりて永遠の平和と安全を得るに相違ないのであります。

撰民の話

【敎授の要旨】舊新約の聯絡を付る事。ユダヤ國民の歷史の大切なる事と彼等が選民と稱へられし理由。及びユダヤ敎とキリスト敎との關係を明かにする事。

此の歷史的の話は人に由り解し難き者あれば臨機應變に用ふる方宜し

舊約聖書を熟知せられぬ求道者に了解し易く面白く敎ふる樣注意すべし(例へばアブラハムてふ人物をさながら生ける如く形容して語り又地圖を用ひ示す事)。

以下其儘を求道者に敎ふる爲でなく只敎師の心得と參考として記せしなり。

創世記第十二章を見ると、ユダヤ人の元祖アブラハムが神に召され

選ばれて其國民と親族とより離れ去つたと云ふ歴史上最も重大な記事があります。此の出來事はキリスト降世前約二千年以前の事であつて、今私共の時代はキリスト降世後二千年程となりました、然らばアブラハムと私共とはキリストの降誕期を中心として互に同じ位の年代を隔てゝ居ります、人類を救はんとの神の御目的を果す器として、此「神の友」と呼ばれたアブラハムが御招きを受けたのであります。人類の祖先アダムは聖旨に背いて失敗し、第二に選ばれたノアの子孫亦神に逆つて同じく天意を果さず、三度目に神は個人としてアブラハムを召し神の選民の元祖となし、斯くして此後其選民によりて地上の凡ての人類が祝せらるゝに至る樣計畫し給ひました。而して神はユダヤ民族の特權として左の四つの事をさせ給ひました。即ち

(イ)凡ての人類に神を證する事。

(ロ)神の默示の委託者となる事。

(ハ)メシヤの御降世の準備者となる事。

(ニ)世界人類に祝福をもたらす器となる事。

救はユダヤ人より出たれども之は萬の異邦人の爲でありました、故に神より特に召れたる事は大なる特權であると共に、また大なる責任であることは云ふ迄もなき事で、亞慶士三〇二にもある通りアブラハムの子孫で神の選民たるユダヤ人は他の諸々の種族の中より殊に選ばれ、キリストの御降世まで殆ど二千年間他國民に勝りて神の御恩寵に預かり獨特の敎育と訓練を受け、別けて宗敎上の種々なる御指導と光明を戴いて救主御降誕のため十分の準備を神より受けました。然るに頑迷不信のため、反つてキリストを拒み榮光の主を十字架の死に付すに至り、其の爲に責をうけて其の特權を失ひ二千年後の今日に至る迄回復する事の出來ない大損失を受けたのであります、斯の如くにして選民たるユダヤ人すら神の御目的を成就する能

以賽亞四一〇八
歷代史下廿〇七、
雅各二〇
廿三
賽四三〇
十二、四
四〇八
申命記四
〇七、八
詩百四十
七〇十九
廿
ロマ九〇
四
賽九〇六
七、四十
九一十
〇九十三
〇
米迦五〇
二
ザカリヤ
九〇九
創世記十
二〇二、
三
ロマ十五
〇八一十
約四〇二
二十
徒三〇十
三一十五

はずして失敗に終りました。されど神は最後に此世に遺し給ふた御獨子キリスト・イエスによりて更に新たなる民を選び、今一度往古より懐き給ふた大聖旨を全うする事に務め給ひました。此の選に預り得るものはノアの如き一家族でなく、ユダヤ人の如き一民族でもなく、イエス・キリストを信ずる者をば悉く己が選民と爲し給ふのであります。即ち全世界の人類中より選ばれた神の教會が其であります。信仰篇きアブラハムは「信仰の父」と呼ばれ神の友となる大なる恵を戴きましたが、私共も同じ信仰によりて神と睦び又古の聖者アブラハムと睦ぶ事が出來るのであります。ユダヤ人を通して多くの恵と賜とを受けて居る私共は多大の趣味を以て彼等の歴史を讀むのであります。私共信者の最も貴重する聖書はユダヤ人の手に成り、キリストの十二使徒及最初の信徒も同じくユダヤ人でありました。キリスト御自身も肉によればユダヤ人なるマリヤより生れ給ひました。現今のユダヤ

加拉太三
〇七—九
十四、廿
九、

羅馬九〇
四、五

民族は王なく國なき浮浪の民でありますが、其の歴史はまだ終りを告げず、聖書の預言に照して考ふる時は、昔神の知遇と選とを受けた民族のために尚ほ榮光ある將來を望まずに居られないのであります。

ロマ十一
〇十二、
十五、廿
三、廿五、
廿六、廿
七

以賽亞九
〇六、七、
五十三〇
米迦五〇
二

キリストに關する預言

救主イエス・キリストの御降世に關する萬ての預言は、創世記第三章に芽ざして恰も夜の暗黒去りて東方の徐々に白むが如く、アブラハム、ダビデ、イザヤ其他の預言者と、段々時の進むに隨つて、明白に預言せられたのであります。（二二の平易なる例を面白く話してユダヤ人の救主を迎ふる希望が順次に明になりて之を待ち望むに至りし事を教へよ）。又昔よりユダヤ國の神の殿に於て行はれた種々の儀式犧牲の如きもキリストに關する預言を含んで居ります。聖書中の預言者の預言は度々二つ或は三つの意味を有し、間もなく果さるべきものと、遠き

加拉太四〇四
馬太五〇十七

未來に成就すべきものと、換言すれば物質的に應用すべきと靈的に應用すべきものとがありましたが、神の定め給ひし時に至りて、歴史と萬有の基礎であり中心であるキリスト・イエスが遂に世に降り給ひました。凡ての預言の主題であるキリストは、神の法律と預言とを成就せんがため、又全世界の人類の願望を充たし、凡ての心の慕ひ來むる理想を現實せしめんために顯はれ給ふたのであります。

（ソクラテス、プラトー、孔子、ゾロアスター、釋迦の如き賢哲の師が他國にも起つて切に眞理を追求し、其の得た光明に從つて人々を教へましたのは、幾分の助けとはなりましたものゝ彼等自身は眞の神を明かに認めませんでしたから、充分人を導き得なかつた事は殘念の事と思はれます）

神の三位一體に就て

（若し志願者が此の問題に就き、信仰上困難を感ぜぬならば、信經の終りに至つて之を教ふるも宜し。然し信經の始めに神の唯一なる事を說きながら、すぐ其後父なる神子なる神、聖靈なる神の三位を敎ふる故之れが場合により學ぶ者に困難とならぬにも限らぬ。故に此大問題に就て此處に一言を加ふる事は至當でありませう）

神が御自身の事に就き最初に敎へ給た大眞理は『神は唯一なり』と云ふことであります。世界の或る人民は神々を拜したに拘らず、ユダヤ國には唯一の眞神を拜する信仰があつて益々之を養成いたしました、然しユダヤ人と雖も確實に此信念を抱くに至るまでに多くの年月と神の種々なる御敎導を受たのでありました。斯して神の唯一なることを充分に會得した時に、神は更に一歩を進めて三位の奥義を世人に顯はし給ひました、即ちキリストの御敎に依つて弟子達は一層明

白に父なる神を認め、それと同時にキリストを神の聖子と信ずる事が出來ました。斯く彼等の信念が此處まで進んで參りました時に、キリストは更に聖靈なる神に就て敎へ給ひました、右の如き經驗と敎育によりて三位一體の神の眞理が弟子達に授けられたのであります。如何様な比喩や說明を用ひても三位一體の奥妙神秘なる眞理を充分說明する事は出來ませんが、幾分か似通つた一二の例を擧げて考ふるも、時に取つての助けとなることゝ思ひます。人によりて種々な例證を用ひますが、聖パトリックの用ひたものは最も簡單なものであります。此聖徒は五世紀の頃愛蘭土に宣敎せし人で、神の三位一體を例證するに常にシャムロック（日本の紫雲英の類にして今猶は豊かに彼の地に繁茂し、現今では愛蘭土の紋章に用ひられる草）を摘み取りて一の莖に三の完全な葉片が集つて一の全き葉を形造つて居るのを示して、獨一の神に三位ある事實を說明致しました。然し之は物質的比喩のみで

實に不完全であります。私共が常に記憶して居る可き事は三位一體の敎理は全く靈の問題である事であります。人間相互の交りに於ても二人の意志が投合する時に、俗に「二つの心が一となる」と云ひますが是は靈なる神が三位に在しながら一體に在す事を私共に暗示するものであります。又人間自身に就て考へましても、人の中に智情意と各異つた力あれども相一致して活動して居る事も疑ふべからざる事實であります。古來日本人中にも一人の人に數多の靈の存すると云ふ信念がありましたが、是等は皆人間が單一なる者では無いと云ふ考より起る事で、自ら人であり乍ら他人の事は愚か、己自身の事でさへ猶不可解の點が多いのでありますから、まして宇宙の主宰者である神に就て不可識の點あるは異しむに足らぬのであります。私共が神に信賴するのは恰も幼子が智慧や力に由らず、何等むつかしき理屈も知らず、唯だ自分の兩親であると云ふ一の信念を以て、少しの疑

創世記一〇廿六、三〇廿二
民數記六〇廿四—廿六
賽六〇三

もなく心配も無く、全く兩親に依り頼みて喜んで居るが如くなすべき筈であります。

此の三位一體の秘義、及び私共の信仰の中に含まれる他の奥義に對して私共信者は、たゞ深き謙遜を以て跪づいて主を伏し拜み、天使と共に『聖なる哉、聖なる哉、聖なる哉萬軍の神』と讃めたゝへて凡ての榮光を神に歸する外無いのであります。父と子と聖靈に榮光あれアアメン。

（教會に於ける禮拜に常に使用する神を頌讃する言語が唯だ形式に流れ、至誠の念を缺く事無き樣深く注意せねばなりませぬ）

舊約書中三位に就ては只だかすかに暗示されて居るのみであります、

ニケヤ信經
アタナシオ信經
約翰一〇一—四
來一〇二三

子なる神

我はその獨子・我等の主イエス・キリストを信ず

キリストの神性

今日教育のある多くの未信者は、キリストに對して尊敬と稱讃の念を抱いて居りますが、キリストの神で在す事を信じませぬ。されど信者はキリストを神の獨子で有ると信ずるのであります。斯く云へば或る人は信者は皆神の子ではないか、然れば何故キリストのみを神の獨子と稱へるかと問ひませうが、キリストと神との御關係は私共人類と神との關係と全く異り、吾等は神によりて造られ贖はれて初めて神の子たる譽を戴くものでありますが、キリストは造られずして永遠より神の獨子にて、父なる神と同一の神性を有し、永遠より永遠迄全き神にて在し、父と聖靈と共に萬物を創造し、今に至る迄、之をさゝへ、支配な

賽九〇六、七
米迦五〇二
賽四十〇九—十一
路加一〇三二—三五
馬太一〇二三
約翰五〇十七、十八、廿一、廿三、十〇三十、十七〇五
馬太三〇十七
馬太十七〇五

し給ひます、舊約の預言にも人よりも更に勝れたる偉大なる者の顯はるゝ事及び萬民の爲めの働きは神にあらざれば成就しがたき事を記して有ります、又異邦人の識者も神の他に誰か此の罪惡の世を救ひ得るであらうかと憂ひて居りました。キリストの母聖マリヤが受けた天使よりの御告にも其の生まるゝ處の者は「至高者の子」(神の子と云ふ意味)と稱へられ、其支配する國は「終ることあらざるべし」とあります。キリスト御自身も自らの事に就き屢々父なる神と同一のものとし或ひは等しき者として語り給ひ、約翰傳第十七章の御祈禱の中にも常に『創世より先に有し所の榮云々』と云ふ句を御用ひになりました。神も亦キリストを御自分の愛子と稱へ給ふた事は、主がヨルダン河にてバブテスマを受け給ふた時と、高き山にて御變貌の時と二度錄してあります。キリストの尊き神性は主が地上に在し給ふた間其の性格と御言と御働きとに常に顯はれました。されども固く唯一神教を奉じ

使徒十四〇十一—十三
ヨハネ廿〇廿八

てゐたユダヤ人にはキリストを神と信ずる事は困難でありました。若しキリストがユダヤならざる他の國に生れ給ふたならば、人々は異なる新しき神として歡迎したでありませうが、キリスト御降世時代のユダヤは獨一の神に深き信念を置いて、他國に於ける如く輕々しく何物にも神てふ言葉を亂用致しませんでした。若しキリストにして實に神に在し給ふならば、勿論先祖たちから崇敬して拜み奉れる「エホバ」に在す筈でありました。弟子達はキリストに從がつて其の神性を認めずに居られませんでした。此故に聖トマスの「吾主よ吾神よ」との言葉の裏面に潛んで居る深き高き意味は私共の今想像し難き程であります。

最初に信仰の進み遲くて「信仰薄き者よ」と屢譴しめられたれど、遂にペテロ、ヨハネ、ヤコブ等の如き救主の遺業を嗣ぐに足る大なる使徒及び聖徒が起りました。馬太、馬可、路加の三福音は何れもキリストの神

たる事を明かに述べてありますが、一番おそく書かれた約翰傳は適々此の眞理が最も烈しく反對せられた時に成りしかば特に主の神性に重きを置きて最明確に錄してあります。ヨハネはキリストにつきて、人より神或は神の如きものとなり給ふたと云はず、神が人となり給ふたのであると證明して居ります。彼れは福音書を錄した目的を述べ『汝等をしてイエスの神の子キリストなる事を信ぜしめ云々』と記しました。他の御弟子よりも一番能くキリストを熟知し、主に愛せられたヨハネが斯くまで確實にキリストの神たる事を認めたならば、私共が之を疑ふ餘地はありません。啻に疑はぬばかりでなく、私共も熱心と忠實と謙遜とを以てキリスト及び其の御言と御業を研究しますならば、ヨハネと同じく深く此眞理を味ふ事が出來るのであります。キリストは御自分の神たる事を深く意識し給ひました故に非常なる權威を以て「我に來れ」と宣ふたのであります。

約翰一〇一—四十四
約翰廿〇三一
馬太十一〇廿八

キリストが御自身に就てなし給ふた大なる主張

(一)神と同一で在す事。
(二)罪の赦と平安とを與へ玉ふ事。
(三)人類の審判主で在す事。
(四)人類の靈性と肉體とを生かし給ふ事。
(五)世の光で在す事。
(六)道であり眞理であり生命で在す事。

等であります。

キリストの神性の最大なる證は主の復活で、榮光ある昇天は其の後に起りました。この大事實を目擊せしより御弟子達の信仰が動すべからず拔くべからざる堅固な基を得たのであります。キリストが眞に神にて在すか否かは私共に非常な關係のある問題で、キリストが神で在さぬならば、人間の爲めに成し給ふた過去の大事業も、現に我に與

ヨハネ五〇十七、十八、廿三、十〇三十
馬太十一〇廿八、廿九
可二〇十
約翰十四〇廿七
馬太七〇廿一—廿三、廿五
〇卅一—卅二
ヨハネ五〇廿二、廿七
約翰六〇卅五、五四
約翰八〇十二
約翰十四〇六
羅馬一〇四

へ給ふ御指導と御仲保も、未來永遠の御助と御救も私共人類のために何等特別の功力なきものとなり終りませう。されどキリスト御降世後殆ど二千年の今日に於ても私共はキリストを人類の救主とし、神の凡ての屬性を備へ給ふ全智全能の主とし、永久に個人の靈魂に生命を與へ給ふ主として仰ぐのであります。私共の力はキリストと靈的一致を保つ事によりて得らるゝのであります。私共は洗禮を受けて子なる神の聖名に入れられるので、殉教の死を遂げたる偉人の名に入れられるのではありません。私共は詩篇の作者と共に『山未だ生いず、汝未だ地と世界とを造り給はざりし時永遠より永遠まで汝は神なり』と呼び奉るは當然であります。

キリストの神性に就きてキリスト教會の信仰を最も充分に表したる言はニケヤ信經の中にあります。之は紀元後三百二十五年にニケアの議會に於てキリストの神性を拒める教義を敎會より排斥するために決定されたものであります。又アタナシオ信經の中にも特にキリストの神性を強く記してあります、尙キリストの神性に就き進んで研究せんと望む人は、哥林多後八〇九、腓立比二〇六、哥羅西一〇十五―十九、希伯來一〇等を讀めば大なる助となります。

キリストの聖名

【一】『主』とは天使もキリストに對して用ひたる稱號にして、默示錄中に二回イエス・キリストの御名を「諸の王の王、主の主」と記してあります(新約書早晩約中天皇の爲めの祈參照)。

キリストは己に屬ける者とせんがために私どもを贖ひ給ふ故に私共は自らをキリストの僕と稱ふる事を喜ぶものであります。聖パウロは己の事をキリストの僕(原語は奴隸)と呼びました。キリスト・イエスを主と信ずると其の信仰を告白する事との大切なるは『汝口にて主イエスを認はし又汝心にて神の彼を死より甦へらしゝことを

路二〇十
默示十七
〇十四
岡十九〇
十六
約翰十三
〇十三、
二十〇二
八
徒十〇三
十六
提多二〇
十四
彼得前二
〇九
ロマ一〇
一
徒廿七〇
廿三
羅馬十〇
九

信せば救はるべし』との言葉に由つて解ります。斯る眞面目な忠實な確信と告白とは聖靈の助けによりてのみ弱き人間が爲し得るのであります。然し眞心よりせず唯だ口のみでキリストを主と稱へる者は天國に入ることは許されぬのであります。『主よ』と云ふ言葉の裏面には服從すべき事が含まれて居ります。私共が試誘に逢ふ時、まだ神を知らず神を信せざる人の中にある時に、心中にて『我が主よ、我が神よ』と稱へて私共は主のもの、主は私共の主であることを常に記憶し感謝するならば、大なる助と慰を得るのであります。

【三】『イエス』凡そ子供の名は兩親か親戚か又は兩親の尊敬して居る人によつて附けて貰ふのでありますが、此の聖名は主の御降誕前に神がヨセフとマリアに遣し給ふた天使に由つて告げられたものであります。

キリストが此の地上に人の子として在した間、此の名によりて友に

哥林多前十二〇三
馬太七〇廿一

も敵にも知られ給ひました。ナザレの村の幼童たりし時も、十字架上に釘けられ給ひし時にも同じく此名でありました。其の意味は誠に美しくして「エホバ」と「救」との二の言を合せた意で舊約書にあるヨシアも同じ意味の名であります。

キリストの外に同じ名をもつた人が多くありましたが、其の尊く美しき名の意味を全うした者は唯だ主イエス・キリストのみであります。主イエスは人を罪の罰と、罪の力と罪の中より救ひ給ふのであります。

馬太傳一章廿一節に「其民を云々」とあります。此は凡て主を信じて心に受入れる者を指すので、「救はん」とは實に明確な神の御約束であるから私らが憂ひの時艱難の時失望の時に一心に主イエスにすがり得るのであります、是は大なる幸であります。

「罪より」とある此の言葉の内には罪を全く赦さるゝ事と罪と關係を切て罪より全く離れる事との意味が含まれてあります。罪を持ちつゝ

徒四〇十二
哥後五〇十、四、十五
加拉二〇廿
以弗所二〇—十
哥羅四一〇十三、十四
提多二〇十四
彼前二〇廿四
ロマ七〇二十四、二十五

救はるゝ事は不可能であります。主の赦罪は唯罪の結果から赦さるのみでなく、罪そのものより救はるゝ事を言ふのであります。

加拉太一、二　波前四〇

此點に就き屢不完全な思想を持つ恐れがありますから、教師は特に注意して洗禮志願者に此の事を教へねばなりません。

志願者のためにイエス・キリストの歴史上の事實を始めより教へてその知識の土臺を堅く据る事は大切であります。イエス・キリストがユダヤと云ふ國に於て現實に生活し給ふた事實を確と會得せしめねばなりませんから。

私共は尊貴の方々の御名を輕々しく言ひません。然ば「イエス」てふ御名も常に敬虔の態度をもて之を稱へねばなりません。單に「イエス」と言はず「主イエス」又は「イエス・キリスト」と言ふやうに心得ねばなりません。

凡ての時、特に信經を唱ふる中に、イエスの聖名を稱へる時に首を下げる事は古い習慣で、今猶多數の信者の行ふ儀式であります。之はキリストを神として崇び拜む意を表示するのであります。

【三】『キリスト』此の聖名はイエスの尊稱で、信仰と云ふ事を包含して居りますから、實は未信者によりて用ひらるべき言ではありません。ユダヤ人は往古より大なる救主、即ちメッシヤ(希伯來語)又はキリスト(希臘語)の顯はるゝ事を待ち望み、此のユダヤ人の希望は延いて廣く異邦人にまで及びました。其の結果はキリスト御降世の頃、東洋の諸國は一般にユダヤより世界の主權者、世の救主が出づべしと期待して居た事はスートニアスやタシタス(羅馬の歴史家)が明かに錄して居ります。故にイエスが神より遣はされた神の子である事實を拒むユダヤ人は、昔よりナザレのイエスをキリストと呼ぶ事を拒み、今日もキリストてふ名を主に附けないのであります。

ダニエル九〇廿五　路三〇十　約翰一〇四十一、四〇廿五　四〇廿六

キリストと云ふ言は『膏灌がれたる者』即ち聖別せられたるもの

創世二八〇十八
士師九〇九
列王十九〇十六、三十〇廿九、卅
出埃及四十〇十三—十五
詩百卅三〇二
撒母前十〇二、十六〇十二、十三
列王上一〇卅九

【膏】パレスチナの近隣の亞細亞諸國及び南歐羅巴にはオリーブの木が多く生じて、其の果實より油を取ります。此油の用途は種々ありて燈火、料理、薫物、香具、藥品、又防腐用(金屬を磨き、革を柔げ、象芽の保存等)に用ひ、ユダヤ人には非常に重んぜられた貴重品でありました。又ギリシヤ人は此橄欖の木をば智慧の女神が初めてアデンスの宮に生へさせた最も貴重な賜であると言ひ傳へたのであります。此膏は舊約新約何れに於ても惠賜の象徴として用ひられました。

ユダヤ人の中に膏を灌がれて任命せられる職が三つあります。

(一)預言者(エリシヤの如し)

(二)祭司(アロンの如し)

(三)王(サウロ、ダビデの如き)

(今日も英國其他の國にては戴冠式に之を用ふ)。

此の膏を灌ぐは左の三の事を示す爲であります。

詩八十九〇二十
詩九十二〇十
詩四十五〇七、二十三〇五
馬太三〇十六
路加四〇一、十四、十八
使徒十〇三八
約翰傳十七〇十九
馬太十三〇五十七
路十三〇卅三
太二十一〇十一
約翰六〇十四
同七〇四十
約翰一〇一

一、灌がれた者が特に其の任ぜられた働を爲す爲め神に聖別せらる事。

二、其重大なる任務を果す爲めに神より豊かなる惠を與へらるゝ事。

三、慰藉と喜悅とを神より受くる事。

主イエス・キリストは文字通りの灌膏式を受け給ひませんでしたが、父神より膏の表示したるもの即ち「聖靈と才能を」與へられ(特に主の授洗の時に)給ひました。即ちキリストは靈的の意味にて神に膏灌がれ此の世に於て重大な働をなすために、聖別され、遣はされて人類一般のため又個人の靈魂のために預言者、祭司、王となり給ひました。

【一】預言者。キリストは靈の大なる眞理を顯はす教師で在りました。キリストも自らも人民も斯く主を呼びました、預言者は主として神のため神の代りに語るもので(未來に就て預め語る事は其職分の半ばに過ぎないのであります)、キリストは神と神の聖旨を顯はし給ふ「神の

希伯來五〇五、六、十、七章以下十章迄詩百十〇四

羅馬十四〇十七約十八〇三十三—七馬太廿八〇十八路加一〇卅二、三、以弗所一〇二十一二十二彼前三〇二十二

馬太一〇廿路一〇卅五

道」で在しました、

【二】祭司。キリストは、私共人類の爲め御自身を犧牲として神の前に献げ給ふ祭司で、又神の右に座して人のために仲保を爲し給ふ祭司であります。恰も古の祭司長が犧牲の血を以て至聖所に入り民のために取成しの祈禱を捧げたと同じであります。

【三】王。キリストは天の王國を支配し給ふ王で、此の王國が益々地上に擴張せられ明現するため即ち『天國を來らせ給へ』との祈を實現する所の王であります。キリストは十字架の極刑に逢ひ給ふ前夜、ピラトの面前に審判を受け、御自分の生命が、御口より出づる一言の御答によりて定まる場合に於ても、御自身が王であると云ふ事を主張し給ひました。

御降誕

主は聖靈によりて胎り、處女マリアより生れ

羅馬五〇十四哥林多前十五〇四五聖洗式二百六十頁

子なる神が人性を取り給ふたと云ふは、如何にも神秘的であるは論を待たぬ事であります。主はヨセフを義理の父として有つ外に肉體の父が無かつたのであります。實に主は完き人の資格を備へた新しき人でありました。第二のアダムと呼ばれた全き人なる主イエスは、過去の罪てふ汚れた遺傳の羈束を脱して神の新しき創造物でありました。第一のアダムは人類の始祖でありましたが罪の遺産を後世に遺しました。然し第二のアダムは罪惡と鬪ひ連戰連勝の榮を得て、御降誕の時も死に給ふた時も同じく罪なき人でありました。罪惡に充てる此世を一點の罪なく渡りて、人類の爲めに新しき生命の根源となり給ひました。

神の聖子の受肉降誕には如何なる意味がありませうか。

【一】之は神が人性を取り給ふた事で、換言すれば人の性が神の地位に引上げられたのであります。

【二】之は永遠の神の顯現即ち(イ)永遠の天父の仁恵、(ロ)贖主の慈愛、(ハ)聖靈の絶大なる權威と能力とが現はされたのであります。

【三】神は人間として人間の爲めに勝利を得給ひましたのであります。此の勝利を得るには惡魔の工を毀ち、闇の王國を亡して光明の王國を建てる事が必要でありました。而も主の受肉降誕に由りて惡魔の國は破られ、今なほ受肉降誕の御働を繼續して居る敎會は、惡魔の上に全き勝利を得るに至るのであります。

主イエスの御降誕地は多くの人の誤解せる處でありますが、其は西洋でなく、東洋亞細亞の一小國パレスチナに生れ給ふたのであります。パレスチナは亞細亞、歐羅巴、亞弗利加の三大陸の中央に當る處であります。

主の御降誕の記事は馬太傳第一章に於てはヨセフの方面より、路加傳第一、二章にはマリアの方面より、何れも最趣味多く描かれて居ます。

其御降誕日は確實に知る事が出來ませんが、初代のキリスト敎徒が十二月二十五日を紀念の日と定めました。之には多分歷史上の根據がありませうが、又此の世の靈的暗黑の冬より義の太陽の生れ出でたるに比べ、異敎徒の間に存する一陽來復の冬の祭を採用して之を潔めたのであると云ふ說は事實らしくあります。

兎に角十二月二十五日は主の御降誕の感謝日として、家族の和樂、一般の慈善の期節として現今世界中に守られて居ます。主の御降誕によりて世に生れ出づる萬ての子供と其の母たちは淸き榮光に浴する事が出來る樣になりました。

處女マリア

マリアに就ての思想は婦人にとりて特に尊いものであります。明白に聖書に錄してありませんが、マリアは確かにユダ族に屬し王の血統であつた事が聖書の中に暗示されてあります。即ちヨセフと同樣

に名高きダビデ王の子孫に當るのであります。ヨセフの系圖は馬太傳にも路加傳にも簡略に錄してあります。若しもキリストの當時、ユダヤの國が羅馬に屬せずに獨立した王國であつたならば、キリストも皇太子として生れ相當な尊敬を受けたでありませうが、當時此の尊い血統の一家族も殆ど世人に忘れられ、普通の人々と同じく生活のために勞働せねばならぬ境遇にあつたのであります。唯だヨセフとマリアは此の國民の特徴として其系圖を大切に保存致しました。（系圖を重んずる點に於てはユダヤ人も日本人もよく相似て居ります）。ユダヤ人特に其內のダビデの子孫たる人々は常にダビデの血統なる約束の王が己の家族に生れ來る事を期待して居つたのであります。マリアは斯く血統の尊きばかりでなく誠に高潔な心を持つた婦人でありました。神はユダヤの凡ての母等が斯くも待望して居た喜と望とをマリアに與へ、彼女を選みてキリストの母となる最大の名譽を得させ

路加一〇、廿八、三十の天使の言、同一〇、廿八のマリアの答參照

路一〇、三十二、六十九

給ふた理由は、マリアの潔い謙遜な乙女で、且つ敬虔の念に富み神に信頼する心が深かつたからであります。

舊約聖書の始に自ら罪を犯してバの話が錄され、新約聖書の始には世の喜と望である救世主キリストの母マリアの記事が錄されあるは趣味ある對照であります。處女マリア蒙告の紀念日は三月廿五日であります。此の紀念日は特別に婦人によつて守らる可きものであります。

約翰一〇、十四

キリストの人性

キリストは萬代の前より神の聖子に在まして、神たるの性を捨てず人類に悲哀と艱難とを來たしたエして人性を取り給ふた故に、完き神にして完き人で在し給ひます。私共は卑立比二〇五―八を讀むときにキリストの謙遜即ち『自ら其の神と匹しくある處の事を棄て難き事と思ひ給はず』、喜んで『己を虛うし』給ひし事、及び其の犧牲獻身の御生涯が最後の御苦と死を別と

して、如何程の深きものであつたかは私共の想像だも及ばない處であります、

（一）**キリストは私共と同じく肉體を有ち給ひました。**

主は他の小供等と同じ様に年々成長し幼年少年青年壯年の階段を盡く經給ひましたが、何れの時期にも完全な性格を有ち給ひました。さればキリストは人間一生の凡ての時期に於ける理想的の人格者であります。キリストの若年の頃の話は殆ど錄されてありませんが三十歳以後の記事は極めて詳細であります。人としてのキリストは私共と同じ様に飢ゑ渴き給ひ、疲勞して寢り給ひ、苦み艱み又死に給ひました。主は誠に私共と同じ人間で在し給ひました。私共は主が賤しき僕の貌を厭はず、肉體を取つて人の如くなり給ふた事を思へば自ら此の身體を尊び健康に注意し、肉體上の生活を聖くし、言行動作凡て美しくなる樣に勉めねばならぬ事を知るのであります。

路加四〇　約翰四〇、十六七、九〇二八　馬太廿一　馬可一〇十八　三八　約翰十三

來二〇十四　路加二〇四十、五二

（二）**キリストは人間の意思、靈性、感情を具有し給ひました。**　即ち

（イ）其の智慧は愈々增し給ふた事。

路加二〇五二

（ロ）心に喜び給ふた事。

路加十〇廿一

（ハ）悲しみ憂を催し給ふた事。

馬可七〇八　三四　〇十二　馬太二六　〇三七　三八　約翰十一　〇三五　路加十九　〇四十一　馬太八〇　十　馬可六〇六　馬可三〇　五　十〇〇　十四　馬可六〇　三四

（ニ）奇しみ給ふた事。

（ホ）義しき怒を表し給ふた事。

（ヘ）憐憫の情を起し給ふた事であります。

（三）人間の靈魂を備へ給ひました。

死に給ふた時に主の魂は其の肉體を離れ、普通の人間と同樣に死に給ふたのであります。

（四）キリストは萬事に私共の如くに誘はれ給ひました。

試錬は眞に苦痛であります。而も主は私共と同樣に誘はれて艱難を受け給ひました。希伯來二〇十七に『諸事に於て兄弟の如くなる云

彼得前三　〇十八、十九　希伯來四　〇十五

希伯來二〇十八

出埃及三〇七以賽亞、六十三〇九

希伯來二〇十四—十八、四〇十五、十六を再讀せられよ

約翰十六〇卅二

々』とありますが、之はキリストが私共の如き罪と絶えず苦戰せねばならぬ者と同じ經驗をなし給ふたのを意味するのでありませう。唯だ異る點はキリストは私共の如く罪を犯し給ひませぬのであります。

(五)主キリストの御同情の御力。

最初より三位一體の神は滿腔の御同情をもつて凡てを了解し給ひますから、私共は神の御慈愛と御同情に信頼し得可きものでありますが、之と同時に私共の大なる助と慰となる一事は、子なる神は人となりて人生の凡ての方面に於ける束縛と悲哀と苦難を充分に熟知し給ふた事であります。私共が喜ぶ時に主も共に喜びて(約翰二〇一にあるカナの結婚の如く)私共の喜を增し加へ給ひ、私共が愛する者を喪ふて悲歎の涙に暮るゝ時、主が昔ラザロの墓前に同情の涙を流し給ふた事を記憶し、昨日も今日も永遠に變らざる主の御同情によりて慰められ、私共が人の誤解や反對を受けて憂愁と寂寞とを感ずる時は、主が御

馬太二六〇四一

馬太廿六〇三八

在世の折に淋しさを感じ殘忍なる敵の反對と迫害に艱まされ給ふた事を思ひて慰藉と勇氣を受くるのであります。キリストは能く私共の肉體の弱きを知りて助け給ひます。主キリストの味はひ給ふた苦痛と悲哀との深大なる事は測り知る事能はざる程で『我心いたく憂ひて死ぬるばかりなり』と仰せられた言によりて其の幾分を悟るのみであります。されば死を歎き病を憂ふる者がイエス・キリストの人としての御生涯と其御同情とを考へて大なる慰を得るは決して理なき事でないのは明白であります。戰役の當時、幾百十の傷病兵の多くの者が病床に呻吟せる間にも主によりて大なる慰籍を得たるも、その一例であります。

キリストの御傳教

福音書に錄された踰越の節の數と他のしるし(毎年執行する春の祭)によりて推測すれば、主の御洗禮より十字架の死までは多分三十年半ばか

りであつたと知れます。主は此の三十年餘の年月の多くをガリラヤとユダヤに過し、其の他は西北シドンの國境や東北カイザリヤピリピや又ヨルダン河の東の方なぞへ短い旅行をなされたのみでありました。此の數年間は主に取りて最も得意の時であつたが、此の間にエルサレムを中心として諸方の敵はキリストを殺害する準備を致しました。主はこの僅少の年月間に十二の使徒を選びて訓練し、己と共に傳道せしめ、また多くの信者を敎訓し、美しき聖言を宣傳し、偉大なる働をなし給ひ、最後に十字架の死、復活、又榮光ある昇天を以て地上の一大事業を完成し給ひました。

イエス・キリストの傳記の概畧

(一)ベテレヘムにて御降誕、博士の來訪あり。エジプトに逃れ後ナザレの村に歸り給ふ。十二歳の時エルサレムに行き給ふ。其より三十歳までの記事なし。

(二)洗禮のヨハネの時代（凡そ九ケ月若くは十ケ月間）。受洗と荒野の誘惑とによりて公然傳道事業を始むる爲に準備し給ふ。

(三)主の傳道事業の第一年、即ち主御自身を世に示し給ふた年。第一の奇蹟最初の御弟子。ユダヤ（約翰二〇十三三十）サマリア（約翰四〇）及びガリラヤに道を傳へ給ふ。

(四)主の傳道事業の第二年、即ち世と戰ひ給ふた年。エルサレム（約翰五〇）ガラリヤ（山上の說敎等）に道を傳へ給ふ。

(五)主の傳道事業の第三年、即ち世に拒まれ、主に屬ける者に一層明かに御自身を示し給ふた年。變貌。ラザロを生し給ふ。ガリラヤ及び其の北方の國。エルサレム。ユダヤ。及びヨルダンの向ふに道を傳へ給ふ。

(六)エルサレムに於ける最後の週間。終りの晚餐。うらぎり。訴へ。十字架。葬り。

馬可一〇廿三、五〇一一廿一〇廿二一廿四四〇廿七一四一
馬太九〇廿五、路加七〇十四、十五ヨハ子十一〇四三、四四

(七)復活と其の後の四十日間。昇天。

主キリストの大業

キリストの御生涯に包含せられた能力は實に偉大なもので、僅か三年餘りの御傳道の結果が二千年後の今日も絶えず高尚なる働きをなして暗黑と死との世を變じて、光明の世、希望の世と化しつゝあり、尚今後とても永遠に絶ゆる事はありません。主が爲し給ふた奇蹟を考へますに、主は惡の靈を追出し、疾病を癒し、自然界を制御し、人生の最大强敵なる死にさへ打勝ち給ひました。主が此等の奇蹟と休徵をなし給ふとき父なる神と一致し給ひましたが、而も御自分の權威をもつてなされました。主の御弟子達も奇蹟を行ひましたが、そは己の力によらずキリストより力を授けられ其の代表者の地位にて之を行ひました。多くの人はキリストの奇蹟につまづきますが、そは其の人々のキリストに關する智識が未だ狹きためで、先づキリストの神たる方面即ち永遠の神性を研究して之を覺りますならば、疑問も難問も雲霧の如くに消え失せるに相違ありませぬ。

そも〳〵永遠より永遠に在す子なる神は輝く聖位より謙遜りて不自由なる人間の境遇に下り、御年三十歳に至り給ふ迄自ら制して御榮光と御力とを隱し給ひし事は驚く可き事であります。

天上に於て今まで聖子を伏し拜んで居つた聖き天使も必ず斯る感を起しましたでせう。愛の神が此の世に見ゆる形をもて居給ひし時に病者弱者に同情を與へ、接する者を一人々々救ひ給ひし事は至當の事であつて、而も實際愛の神の現はれ給ひし證となりました。

キリストの御教訓

【教授の要旨】主の御教の廣大にして優美なる事及び其の慰藉と力に充つる事を覺えしめる事。而して既に學びたる所を思ひ出して今後尚深く研究せんとの心を起さしむる事。

今左に主の御教訓を畧記す。

(一)愛と慰籍に充ちた聖言

(イ)神が世を愛し給ふこと　(約翰三〇十六)
(ロ)失はれし者に對し　(路加十五〇九、十)
(ハ)勞れし人に對し　(馬太十一〇二八)
(ニ)嬰兒に對し　(馬可十〇一四)
(ホ)憂慮者に對し　(馬太六〇二五—卅四)

(二)命令の聖言

(イ)愛に就て　(馬太五〇四四、約翰十三〇三四)
(ロ)實行すべき事に就て　(路加十〇三七)
(ハ)祈禱に就て　(馬太六〇五—十五、七〇七—十一)

(三)警戒の聖言

(イ)不信仰に對して　(約翰八〇二四)

(ロ)僞善に對して　(馬太七〇三—五、十五—廿三)

(四)證　話

(イ)父に就て　(馬太十三〇路加十五〇など)
(ロ)御自身に就て　(馬太五〇四五、六〇六、八、七〇十一、十〇二九、約翰三〇一六、四〇二四)
(ハ)聖靈に就て　(キリストの神性參照)

洗禮志願者は皆福音書を讀んで主の御教訓を研究すべき者であります(約翰十四〇一六、一七、廿六など)が、此所は大切なる點ゆゑ參考のため右の引照を記す

主キリストの傳記に就て充分此の書に記載できませんが、使徒信經を教ふる中に降誕より十字架までの出來事をつまんで教ふる事は適當でありますまた志願者が此點に就て如何程の智識を得て居るか試す爲めには好機會と思はれます、敎師が主の傳記の綱目を書き記す事は自分の爲にも最もよろしき準備となります。

主の御受難

『ポンテオ・ピラトの時苦難を受け十字架に釘けられキリストの御受難

【教授の要旨】（イ）吾等の信仰の中心たる此の歴史的事實を教ふるに六ヶ敷理屈をさけ、聖書の嚴かで高大なる話を用ひて志願者に其の光影を目のあたり見るが如く感じさせ、終生忘るゝ事なき深き印象を得せしむる事。

（ロ）十字架に包含せる多くの意味を一時に充分悟り得ずとも、其の內の或る點を確實に覺えて測るべからざるキリストの愛を慕ひ、十字架より流れ出づる御惠みに浴し、是れに由りて全く己を捧ぐる獻身の心を起させる事。

信經を唱へて此の一節に至れば自然に聲は低く、思ひは靜かになるのでありまます。キリストの御生涯の間受け給ふた苦難は中々に多くありましたが、終りに近づく程益々劇しうなり最後に至つて絶頂に達したのであります。靜かに考へ回せば、イスカリオテのユダの反逆よりゲッセマネの園の御苦み、續いて敵に捕へられ給ひ、御弟子等は皆逃げ

去り主は夜を徹して祭司の長アンナス、カヤバ、ユダヤ人の議員、ピラト及びヘロデ王の前に於て凡て五回の審判を受け給ひ、嘲弄せられ、鞭うたれ、十字架を負ふて刑場に導びかれ十字架につけられ六時間餘の心身の苦痛と敵の嘲罵凌辱を忍び終に最後を遂げ給ふ迄の御艱苦は到底人の思想言語の及ばぬ處で、唯だ雅歌八〇六、七にある『愛は强くして死の如し、愛は大水も消す事能はず洪水も溺らす事能はず』と云ふ一句を以て此全體の說明に當つる外はありません。

ポンテオ・ピラト

此の人は統御し難きユダヤ國の總督として羅馬の皇帝より派遣された羅馬人であります。ポンテオ・ピラトと云ふ名は、キリストに關する出來事が皆實際の歷史的事實である事を私共の心に連想させるもので、新約聖書の記事と羅馬の歷史との連鎖になつて居ります（勿論他にも多くありますが）。新約聖書にある出來事は傳說や巧に仕組まれ

彼得前二〇廿一—二五
希伯來十二〇二、三

約翰十九、十二

た美しい小説の類では無く、深い考究と調査とを經て居る打消し難い歴史的の事實であります。聖書には唯だ此の恐ろしき罪をのみ錄してありますが、羅馬の歴史家タシタスはピラトのユダヤ在任中に主イエスが十字架に附けられ給ふた事を錄し、又ユダヤの歴史家ジョセフアスとピロ等はピラトの此の外の殘酷なる罪を記述して居ります。總督ピラトは常にユダヤ人を激怒せしむる樣な事のみをなして遂にユダヤ人のため羅馬の皇帝に上告せらるゝに至りました。此は彼がキリストを審判する時に憂慮した事でありましたが遂に事實となつて本國に呼び戻され、佛蘭西に流浪の身となり其處にて自殺して果てたと云ひます。

ピラトの不義な審判の原因は（一）其の道德的性格の薄弱であつた事にありました。彼は大膽であるべき處に臆病で、柔和なるべき場合に亂暴でありました。從つてイエス・キリストを審判した時にも主を殺す考へは毫もありませんでしたが、さりとて主を救ひ出す勇氣もなかつたのでありました。（二）利己主義であつた事を避け、唯だ帝王に對して己の地位に利ある事を考へ、群集が主を十字架に附けよと呼んだ時に、日頃自分の嫌はれて居るを知りて人望を恢復せんが爲め其願ひに任せたのであります。ピラトは斯の如くにして遂に不正不義の裁判を致しました。されども其の妻がキリストを救ひたいと思つて出來る限り盡しました事は私共婦人の大なる喜びを以て記憶すべき事でありました。

マタ二七、一八參照

キリストが斯くまで憎まれ給ふた理由

之れは偏に嫉妬心から起つたのであります、嫉妬は恐ろしい大罪惡であります、別けて自分よりも清潔善良の人が自分よりも多くの善事を爲し、自分より以上の權力を得る事に因りて嫉妬心を起すならば此は實に憎むべき罪であります。さて何故キリストは斯く嫉妬と反抗の

的になり給ひましたか

（一）主キリストの清淨無罪な御生涯が敵人に取つて不斷の咎責、懲戒となりました。其の敵人とは當時の重なる宗教家にして即ち（イ）パリサイ人とて傳說を重んじ形式儀文に拘泥し迷信に陷り、罪惡に惑溺し僞善者となつた者（ロ）サドカイ人とて祭司中の權力ある者等の重に屬した宗派で、懷疑的で一定の主義主張なく極めて世間的であつた者（ハ）學者（教法師）と云はれて舊約聖書及び他の宗教書籍をうつし其の書の說を淺薄に教授した者（ニ）其の他長老及ユダヤ人の司とてサンヒドリム（宗教の議會）の議員で年齡經驗ともに長じ羅馬人より相當の權威を附與せられた（死刑を執行する權は許されず）ユダヤ國では重要の地位を占めたるが、アリマタヤのヨセフの如き僅少の人を除く外は、皆神より遠く離れ靈的生命に乏しき生涯を送りながら自分では餘程立派な者の如く公言して普通の人々を輕視し、其の人々より尊敬を受くる事を至當と思ふた者であります。

（二）主キリストの義しく大膽なる譴責を蒙つたゆゑ。

馬太五章より七章にある山上の垂訓、馬太二十三章及び他の數ヶ處の御誡、又祭司等が自ら大に利する爲めに許した殿の中の商賈をキリストが追ひ拂ひ給ふた事により、人民が漸次に眼を覺まし來りて宗教家や教師の權威が衰へ始めました。

（三）主キリストの人望が盛になつた故。

主はガリラヤ地方の人々の中にて教へ給ふた故、祭節の時等にヱルサレムに參つても皆喜んで主の教へに聞き從ひました、之によりてパリサイ人は且つ怒り、且つ恐れて非常に嫉妬心を起しました。

（四）主が安息日に人を救ひ給ふた故。

パリサイ人は安息日に就き嚴酷な細則を設けて安息の日を却て重荷の日の如くなし、此の日には病人あるも醫師を迎へるを禁じ、些細な荷

約翰五〇九—十八、九〇十四、十六、路加六〇一—十一、約翰五〇十八、八〇五八、五九、十〇、卅、卅一、卅三、卅九

をも負ひ運ぶを禁じ、安息日の主意を全く轉倒してしまひました。キリストは之れに反し安息日に病者を癒し、なやめる者を助け、大いに民の束縛を解き重荷を輕くし給ひました。

(五)主キリストが自ら神の子であると主張し給ひました故。

(六)世人の希望に反し地上の王となりて、ユダヤ人を羅馬の支配より脱せしむる樣な事を拒み給ひました故。ユダヤ國民一般の理想と希望は羅馬人を擊退して獨立の富強な國となすことで、メシヤなるキリストは必ず此の大業を成し給ふであらうと期待して居りました。然るにキリストは全く之を拒み給ましたので、主に附き從つて居た多くの野心家は全く失望してしまひました。イスカリオテのユダの謀反も或は人心がキリストより反き去つたに原因したのでありませう。

主キリストが訟へられ給ふた罪狀

(一)最初は別に定まつた訴とてはありませんでした、祭司の長等はキリストを罪に定める口實を得る事に勉め、僞りの證を求めたとありま

馬太二六〇五九

馬太二六〇六三—六六

馬可十四〇六一—六四

約翰一九〇七

路加二三〇二

約翰十八〇三三—三八

路廿三〇四、十四、廿三〇十五

す。然し遂にキリストが御自分は神の子キリストであると明言し給ふた言を捕へて神を褻す者として死罪に定めました。

(二)ピラトは宗教上の件に關係しませんが、謀反や叛逆と云ふことには細心注意しました、其はユダヤ人は常より甚だ統治し難き民でありましたから此の點を彼が常に憂慮して居たのであります。其れを知つて居る主の敵は、さかしくも此の政治的訴へを以てキリストをピラトに訴へました。而してユダヤ人の最初に提出した二ッの訴へも僞りであり、又第三の證として提出した主が自ら王であると仰せられたのも『我が國は此世の國にあらず』との御言により政治上の意味を含まないことが明になりましたから、是れも前の二ッと同じく妄證に過ぎなかつたのであります。斯くキリストは種々の方面より審べられ給ふたに拘はらず唯一の惡事をも發見する事出來なかつた、ピラトは

『此の人に罪あるを見ず』と公言して主を赦さんとしたのであります。是を見てもキリキトを十字架に架けた事は全く不正不法であることが明らかであります。

主キリストが甘んじて此の刑罰に服し給ふた理由

何故キリストは己を救ひ給はなかつたかとは、度々人の尋ねる問題であります。主は他の殉教者の如く敵の手の中に落ちて自由も力もなくなり給ふたのでせうか。否キリストの死は人に餘義なくせられ給ふたのでは無い、全く心より喜んで人類の救の爲め己を犧牲として献げ給ふたのであります。唯だ人類の爲めの深き愛と強固なる決心とがキリストをして此の不法の死に服せしめたのであります。故に敵が非常に侮蔑して『人を救ひて自ら救ふ能はず』と罵つた言の中には、云ふた本人さへ知らなかつた程の深い眞理がこもつて居ます。

父なる神が之を許し給ふた理由

馬太二六〇二十八—五三
約翰六〇五一、十〇一七、一八、十九〇十、十一
馬太二七〇四二

人を愛し給ふが故に罪の世を救はんとの御目的については、父なる神と子なる神と全く一致し給ひ、父なる神も之れが爲めに大に自らを犧牲とし給ふたのであります。古の聖者アブラハムが其の獨子イサクを壇上に捧げて殆ど殺さんとした豫表によりて、幾分か父なる神が世の爲めに其の獨子を與へ給ふ事の如何に大なる犧牲であるかを推察できませう。罪の怒のみを父なる神に歸し、愛と憐を全く子なる神に歸する事は大なる謬であります。罪に對する怒と罪人に對する愛と憐は、父なる神、子なる神、聖靈なる神、三位共に同意同感に在ますのであります。罪の爲め贖を要求し給ふのも神であり、又其の要求に應じ給ふたのも神であります。福音の起原は父なる神の愛にあつて、其の永遠に變らざる愛の源より子なる神の御働及び聖靈なる神の御力が流れ出づるのであります。

約翰三〇一六
羅馬八〇三二
創世記二二〇一—一四

十字架

主の御受難

これは昔の日本の磔刑の如く戈を以て刺殺すのではありません。キリストの脅に受け給ふた一つの傷は、兵卒が主の死に給ひし後に其の死を確かめんが爲めに刺したのであります。

十字架は羅馬の刑法で、ユダヤ人にては石を以て打殺すのが法でありました、主イエスはユダヤ人により羅馬の官吏に附され、羅馬人によりて死に宣告せられ給たのであります。此はキリストがユダヤ人の爲にも異邦人の爲めにも死に給ふたと云ふ根本の眞理に符合する事で實に趣味深い事であります。主キリストがゲッセマネの園にて敵に捕へられ給ふたより御最後までの御態度は、實に我らの完全な模範であります。其の靜に沈着き而も豪膽に在まして、神たり王たるの威嚴が凡ての御動作に現はれ、聖言は何處迄も眞實にして大膽で何等恐怖なく、貴い御目的を常に目前に置きて、全き愛のうちに凡てを忍び、己を殺す者の爲めにすら憐を以てとりなしの祈を爲し給ひました。彼

の羅馬より來た百人の長の如きは、主の御最後の光景をながめ、其の十字架の恥と苦を忍びて死に給ふた尊き有樣にうたれて『眞に此の人は神の子なり』と感歎の聲を發しました、私共も亦斯く絶叫するの外はありません。

〇十字架上の七言

これは敬虔の念を以て研究せねばなりません。主の十字架上の七言とは

(一)路加傳二十三章三十四節の御言　(二)路加傳二十三章四十三節の御言　(三)約翰傳十九章二十六、二十七節の御言　(四)馬太傳二十七章四十六節の御言（之れは御心に非ハネに對するもの。キリストの時代に『婦』と譯された此の言は非常な尊敬語で羅馬の帝王すらも己の女王を呼ぶに此の名稱を用ひたのであります）(四)馬太傳二十七章四十六節の御言（之れは御心に非常な寂寞を感じ給ふた叫びで、父なる神と罪深き人間とを和らがせん

が爲め、今迄常に力とせられた父なる神との密接な御關係を僅かの間とは云へ絶つかの如き苦痛を耐へ給ふたのであります。然し父なる神が誠に此時主を捨て給ふたと思ふてはなりません。確かに聖父は此の時程深く聖子を愛し給ふた事はありますまい。唯だ暫時私共の罪の雲が其の間を覆ひ隱したのであります。是は一大神秘であつて主の御苦痛の絶頂であります(六)約翰傳十九章三十節の御言、及び(七)路加傳二十三章四十六節の御言であります。

十字架の意味

キリストの死と私共の救ひとの關係を聖書の言を以て事實に重きを置きて單純に敎ふる事が大切であります。或る人は此の理由を詳しく說明せんとして頭腦を痛ましめ、其の爲め反つて眞意の淺くなる事もあります。私共は最も敬虔なる念を以て此の深遠なる奧義を種々なる方面より考へる事が出來ます。

羅馬三〇 廿五 使徒行傳 十七〇卅

十字架により學ぶ敎訓

十字架は世の始よりの多くの罪を見過しにして赦し給ひし神の正義と愛とを明かに顯し給ふ大なる徵證であります。

彼得前一〇十八、十九 來九〇十四、廿六、廿八

(一)之によりて罪の恐る可き性質と其の恐るべき結果とを知る尺度と見ることが出來ます。神の子を十字架に懸けし事實によりて見れば罪の如何程恐ろしいものであるかが知れます。又神の子の犧牲によりて罪惡てふものは神に取りても人類に取りても如何ばかりに大問題であるかを深く知る事が出來ます。

馬太廿〇 二十八

(二)罪の贖の價の甚だ高い事が知れます。即ち疵なく汚なき羔の如きキリストの寶血に由らなければ罪を贖はるゝ事が出來ないのであります、十字架はキリストが御自身を「神の羔」として世人の爲めに獻げ給ふた祭壇であります、此上にキリストは自ら仰せ給ふた如く『多

くの人に代りて贖とならん爲め其の生命を與へ』給ふたのであります。その『多くの人』の中には私如き者も含まれて居ります、即ちパウロが『我を愛し我が爲に己を捨てし者』と云ふた如くであります、主の御言は罪の赦しを求める各人に取つて大いなる慰めを與へるのであります。

加拉太二 ○廿
以弗所三 ○十七— 十九 約翰壹三 ○十六
彼前二 ○廿四 馬太十六 ○廿六

(三)神自らが喜んで人類の凡ての悲哀と苦痛とを嘗め、又御自身にて人間の負ひ難き罪の重荷を負ふて死に給ふ程深く人を愛し給ふ御慈愛の程を知る事が出來ます。

(四)人間の靈魂には主キリストが之を救はんが爲めに死に給ふた程の價値がある事を知るのであります。

キリストの十字架と個人的の救

私共はカルバリ山上の群集の如く唯だ立て御苦痛を眺め、或ひは暫時の間感働して直ぐ冷却する樣な事ではなりません。キリストの死に與かると云ふ事は、もつと〳〵深い事を意味するのであります。以賽亞五十三章彼得前書二章二十四節なぞを靜かに考へて其の有難き事を悟り、キリストが私しの多くの罪と汚れを贖ひ給ふたと確信する處まで進まねばなりませぬ。私共は各自

哥羅西一 ○十四 約翰壹三 ○八 羅馬六 ○

(一)此の十字架の御前に自分の罪を懺悔して御赦を願ひ

(二)次にキリストが憎み給ふた樣に罪を憎み、死に至るまで罪を擊退して全く罪に死なねばなりませぬ。言ひ換へれば、神の御力と自分の意志（神より強められたもの）によりて私共の古き罪の性を亡し、罪に就ては自ら死ねる者を思ひ定めて其如くに行はねばなりません。

路加七 ○四二—四 哥後五 ○十四、十五

さらば遂には主の御憐により主に榮光を歸する事の出來る勝利の生涯を主と偕に送る事が出來ます。

(三)常にキリストを敬愛し奉らねばなりません。

(四)またキリストが愛し給ふた樣に人を愛せねばなりません（犧牲獻

身の精神）。

約翰壹三
〇十六

十字架は今はキリストの象徴、キリストと其の信徒との間柄の徴章、即ち大なる愛と救の記號となつて居りますが、然しキリスト信者は決して十字架を拜む事は爲しません。唯だその聖なる聯想のゆゑに之を尊敬するだけであります。

キリストの死

『死にて葬られ陰府に降り』

キリストは全き人として全き死を味ひ給ひ、その受ける樣に定められ給ふた苦難は、聊も減ずる樣な事は爲し給ひませんでした。然し一たん此の救世の大事業が完成し全き犧牲が一度献せられた時に、主は

來十〇十
二

馬太廿七
〇五十一

「父よ我が魂を汝の手に托く」と安らかに祈禱を捧げ、息絶え給ひました。其時エルサレムの殿の中の祭司の長が一年に一度犧牲の血を持ちて入ることを赦された至聖處の前の幕が、上より下まで二ツに裂

けて聖處の奥が凡ての人の爲めに開かれました。之れと同じく私共は今イエスの血に由りて、其の我等の爲めに開けたる新しき生ける路より憚からずして神の聖前に入ることが出來る樣になりました。受苦日は毎年主の尊き死を記念する爲め思ふ通り嚴格に守る事が稍困難でありますが、日曜日でなき

來十〇十
九—二十
二

を靜肅、嚴格な日として守り、賑かな會合を避け教會の禮拜に出席して二千年前のこの日の出來事を追想し、午前九時より午後三時まで主が十字架上に苦しみ給ふた時を特に記念する事は甚だ大切であり、有益であります。唯に一年一度のみならず毎週金曜日に祈禱と感謝を以て此の事實を記憶するは最も良きことであります。『我は汝が爲めに是を爲せり、汝は我が爲め何を爲せしや』私共は主キリストを模範として如何に生き如何に死ぬべきかを學びませう。若し死の恐怖が私共の心を覆ひますならば、キリストが既に其暗黒の道を通過し給ふ

詩二十三〇四　約翰八〇十二

た故必ず私共に伴ひ給ふのみならず、暗き死の谷をも光の道と爲し給ふ事を記憶すべきであります。『我に從ふ者は暗き中を行かず生命の光を得るなり』とは、キリストが忠實なる聖徒に與へ給ふた御約束であります。尙は引續いて主は『窮なく死を見ざるべし』とまで語り給ひました。死を見る代りに、未だ見ざれども切に愛しまつる處の主イエスを見奉つる事が出來るのであります。キリストを信ずる者に取つては死は世人が思ひ煩ふ樣なものではありません、死は聖徒の爲めには反つて永生に至るの門であります。キリストは之を『眠』と仰せられました。

約翰八〇五一

約翰十一〇二五、二六

約翰十一、十三使徒七〇六十

主の葬

或人々は葬られる事を非常に恐れ厭ひますが、能く考へるならば是れも主の葬られ給ひしに由りて潔められるのであります。信者の葬式は人類の爲に一度墓中に眠り給ふた救主を憶ひ起し、同時に來世の復活を望ませるのであります。ユダヤの富める者の墓は大抵日本にあるものと異なり、大きな磐に側面から穴を穿ち、入口は轉ばす事の出來る石の戸を供へ、洞の中には屍を置く爲め棚が造られて、死體は富める者ならば沒藥や香料等をぬり、立派な白布にて包み其處に安置されるのであります。羅馬人は十字架に釘けられし者の屍を葬むる勞を取らず打捨てゝ置くのが普通であります。ピラトはキリストが既に息絶え給ふたことを確かめた後、御弟子の願に任せて主の屍を葬むる事を許しました。主が死に給ふた後、數人の御弟子方、即ちアリマタヤのヨセフやニコデモ等が漸く勇氣を出して、費用を惜まず、あらゆる尊敬を以てヨセフの所有に係る新らしき墓に尊き御體を葬りました。是は金曜日の夕方で、土曜日はユダヤ人の安息日(休日)でありましたが此の日に祭司等又民の長等よりの願ひ出によりて羅馬の一組の兵士を以て御墓を警固せしめ、總督の判を以て石に封印をいたしました。

約翰十一〇二五、二六　約翰十一、十三使徒七〇六十

約三〇一七〇五十約翰十九〇廿八—四二　馬太二七〇五七—六六

主を信じ主に事へて居た婦人等が金、土、兩日にした事は路加傳廿三章四九、五五、五六に錄されてあります。

路廿三〇
四三
哥林多後
五〇八
ピリピ一
二一、
二三

陰府

主の死に給ふた瞬間に、主の靈は尊體を離れて、死にし人々の居る靈の世界へ救罪の大業の完成した喜びの音を携へて行き給ひました。此處は即ち死にし人の靈魂が復活を待ちつゝある中間の狀態であります。人間死後の靈魂の狀態如何は誰もよく分りません、然しキリスト信徒は其の靈魂が全き平和の內に地上に於けるよりも一層高尙親密な交りをキリストと共に爲し得る場所に行くと確信して居ります。（此は主が十字架上より側の盜人に語り給ひし聖言、及びパウロが死後に關してもつて居た確信等に顯れてあります）主キリストが此の陰府、一名パラダイスに降り給ふことは詩篇十六〇九、十に預言され、又主が其間に昔し此世を去りし人々の靈に救の福音を傳へ給ふた事は彼得前書三〇十八—廿に手短かに記してありますが、此の事に就き私共の知る處は極めて微少であります。既に世を去つた私共の家族や友人に就いては其が信者であれ、未信者であれ、皆愛なる神、全き審判主の聖手に護られて居ると云ふ事を以て滿足せねばなりませぬ、然し私共は現在生ける人々の靈魂を救に導くべき大な責任をゆるかせにしてはなりません。

私共は主の尊體が墓に在り御靈が陰府に降りました事を復活の前日（土曜日）に記念するのであります

主の復活

三日目に死し者の中より甦り、天に昇り、全能の父なる神の右に坐し給ひ【敎授の要旨】主の復活の事實を堅く信じて其の大なる喜びに與らしむること。

主は金曜日に死にて葬むられ給ひましたが前に御約束なされた通

馬太廿〇一九、二六〇卅廿約翰十六〇二十、二十二

り三日目の日曜日の早朝に榮光ある復活を爲し給ひました。それで御弟子等の悲しみと絶望は忽まち大いなる喜びに變りました。私共は毎年此の大事件の起つた時と同じ季節を選みて受苦日に主の死を記念し、復活主日に御復活を記念いたします。主は丁度自然界の萬物が霜枯の長き寢より醒め、四方の景色皆生きかへる美しき春の季節に死の中より甦り給ふたのであります。勿論誰も救主の墓より出で給ふ處を實見した者はありません。羅馬の兵士は天使が墓の戸より石を轉ばしたのを見て逃げ去りました。暫らくして其處に行つた婦人等は空虛となつた墓の中に居つた天使より初めて主の御復活の事實を聞き知りました。其の後主は獨り御墓のもとで歎いて居たマグダラのマリアに現はれ、ついで他の婦人等に現はれ又使徒と他の御弟子に現はれ給ふたのであります。私共婦人は主が甦へり給ふた後第一に婦人に現はれ給ふた事を考へ、主の御憐憫と御愛心を殊更に感ずるのであります、私共キリスト信徒は勉めて御弟子等と喜びを共にし、殊に『主の甦へり給ふた記念日』なる日曜日を喜んで記憶せねばなりません。主の復活を喜ぶは左の理由によります。

(一)主御自身の爲めに喜びます。若し私共が眞實主を愛するならば完全なる愛を持ち完全なる犧牲の御生涯を送り給ふたキリストが不法なる判決を受け、何の説明も辯解もせずに、偉大、聖淨の身であり乍ら苦痛と恥辱との十字架に懸り給ふた事を耐へ難く歎くと共に、遂に神の御力と主の榮光ある復活とによりてキリストの死をいつ迄も歎く必要なからしめ給ふた事を誠に讃美し感謝すべき筈であります。

(二)キリストの御復活はキリストの神たる最も顯著な證據なるが故に喜びます。(イ)キリストが眞に神で在ますなれば私共は主が死に勝ち給ふた何等かの證蹟を與へらるゝ事を當然期待します。(ロ)またキリストが眞に神の聖子であれば私共は必ず父なる神が何等かの徴を

羅馬一〇四
以弗所一〇一九、廿
希伯來二〇九
約翰壹書二〇二
以賽亞五三〇十
約翰十〇一七

以て主の愛子たる事を承認して之に榮光を與へ給ふべしと期待するのであります。主の復活は即ち此の二つの希望を充たして主が自ら『我は神の子眞のキリストなり』と主張したまふた事の眞正なる事を示し且つ父なる神が主を復活せしめ給ふた事によりて主の愛子である事を再び證明し給ふたのであります。

(三)主の復活は十字架に由る主の贖の御事業が完成した事且つ父なる神が其の贖を受納し給ふた事の證據でありあす。キリストは死に臨んで『事終りぬ』と仰せられましたが、誠に主は萬民を全く贖ひ給ひました（聖餐式文中聖別の祈）主は十字架に懸り給ふた時と其の前に、堪へ難き程の苦痛を受け身靈共に人類の罪の爲めの犧牲となり給ひました。然し乍ら榮光ある御復活と共に此等の苦痛は全く去りて主はイザヤ五三〇十一にある『己が魂の煩勞を見て心たらはん』との經驗を喜び始め給ふたのであります。此の犧牲はキリストが私

使徒行傳二〇二四、三二、三〇一五、四〇十、五〇三十、三十一、十〇四十
羅馬四〇二四
以弗所一〇二十
羅馬十四〇二五
哥林多前十五〇十七
羅馬、八〇三三三四

共の爲めに父なる神に捧げ給ふたので、從つてキリストを死より甦へらせ給ふたのも父なる神でありました。主は元より自ら生命を得るの權能あり又之を捐るの權能がありましたが聖子は聖父なしに何事をも爲し給はなかつたので、使徒行傳や他の書にも此の働きは殆ど何時も父なる神に屬せるかの如くに錄されてあります。使徒等が傳道をしました時最も強く論じ、且つ說いた點は、即ち世人が主イエスを拒みましたが神は主を受けて眞にその御獨子であり、約束のメシヤ即ちキリストであるを明らかに示したまふた事でありました。私共に取つてもイエス・キリストが私共の罪の爲めに死に給ふのみでなく、私共の義とせらるゝ爲めに復活し給ふた事は非常なる慰藉となることであります。イエス・キリストが死より復活し給ふた事によりて私共が全たき救を受けるに必要な神の方面の準備の完成せられたのであります。唯だ私共人間の方面の準備は私共各自神の助に由りて之を整

提摩大後一〇十羅馬八〇十一哥後十五〇廿彼前一〇三

へねばなりませぬ。

（四）主の復活は善が惡の上に全き勝利を得た事を證明するものであります。全世界中にて罪なき人は唯だ主のみでありますのに、其の主が殺され給ひ一時神と凡ての善の基は全く失敗に終つたかの如くに見えましたが、神は決して其まゝに捨て置き給ひませんでした。主の復活は即ち勝利の徴でありました、即神は惡魔より、正義は罪惡より、愛は憎惡より、生命は死より強くて勝利を得るもので有ります、私共が最高の勝利を得るは悲哀、苦痛、犧牲、献身によりて得らるゝものであります。受肉降誕の神さへも之れによりて勝利を得給ふたのであります、御復活の後に至りて御弟子は始めて之を悟る事が出來ました。

（五）主の御復活は私共の靈魂と身體の不滅なる事及び其が來世に於て甦りて完成せらるゝ事の證據であります。主は人として死に、人として復活し給ひました故に、主に連りて居る信者も同じく主の復活に

使徒一〇二一、二二、四〇三三、哥後十五〇十四、十五

與り主の榮光に入る事が出來るのであります（詳細は『身體の復活』の條に說ませう）。主の復活はキリスト信者の信仰の基であります、使徒や他の御弟子等は說教毎に此の事實を大膽に宣傳いたしました。聖徒パウロは此の事に就いて『キリスト若し甦らざりしならば我等の宣ぶる處徒然また汝等の信仰も徒然からん』といふて居ります。其の當時に於ても、一人の此の論點に反駁を加へる者なく、此の事實の上に始めて教會が建てられたのであります。なほ又主の復活は證明された歷史上の事實であります。之に就いて多くの有力な證人がありました（四福音書及び哥林多前十五〇三―十）。聖徒パウロは主の復活を確證ある事實として非常に大膽に斷言し且つ甦りし主を見た人々の名や數を擧げて居ります。パウロの書簡の錄された時分には復活の主に逢ふた人々が猶ほ多く世に存在して居りました。主の復活により御弟子の受けた變化、御弟子の心が恐怖より確信に、絶望より

馬可一六〇十一、十四
路加二四〇十一
約翰二十〇二四—二九
使徒二〇二五—三二

勇氣と希望とに變化したのは實に驚く程であります。是も主の復活の眞實なる大な證據であります。御弟子等は主の復活に就いての御約束を忘却して居りました位故容易には信じませんでした。のみならずキリストに就ける舊約聖書の預表及び詩十六〇十の預言を充分に了解することが出來ませんでした。（彼得が後に說き聞かせました通り、此の詩はダビデの事のみでなく主キリストに就ても預言せることは確實であります）

復活の眞實な事を否定せんとの努力は無功であります。唯一點丈けに就て考へても、キリストの多くの敵の一人も、主の御身體が警戒嚴なる墓より消え失せた理由を說明する事が出來ません。御弟子等は警備の兵を追ひ散らす程に强くも大膽でもありません。又馬太廿八〇十一—十五にある守兵がみな勤務中に寢入つて、石の封印の解かれるのも知らなかつたとの話は全くの虛妄であります。若し其が實際ならば兵士は皆重罪に處せ

路加二四〇二五、二六

られた筈であります。若し又敵が御身體を盜み去つたのであらば彼等の都合好き時に又之れを持ち出して御弟子等の說を打破することが出來たでありませう。然し其樣な事は元より無いので、如何しても主の御身體は全く跡を止めず無くなつたのであります。さらば主の甦り給ふた事のみが滿足な說明となるのであります。而も之れは私共に取りては當然な說明であります。主自らも二人の疑へる弟子に向つて「預言者の凡て言ひたる事を信ずる心の遲き愚かなる者よ、キリストは此等の難みを受けて其の榮光に入るべきに非ずや」と仰せられたのであります。

昇天

【敎授要旨】キリストを現に生ける主又救主として崇拜する心を起させること。

復活の後四十日（即ち木曜日）に主は昇天爲し給ひました（今も信者は毎年此の昇天日を記念します）。其の四十日の間主は時々御弟子等に遇ひ聖なる交通を續け給ましたが、度々御弟子が少しも待設け

使徒一〇三　馬太廿八〇十九、二十　馬可十六〇十五　路加二四〇四九、四七、使徒一〇四、五　路加二四〇五二、五三

ない時に現はれ給ふて御弟子等をして何時如何なる事をなし居る時も主が常に靈によりて偕に在まして絶えず指導し給ふことを會得せしむる樣勉め給ひました。御昇天の場處はエルサレムとベタニヤの中間にあるカンラン山上でありました。其の四十日の間に御弟子等はキリストの御復活に就いて充分なる證據を與へられました。

主は最後の御命令即ち (1)萬國の民を教へ導いてバプテスマを施せとの御命令と (2)主が常に聖徒と共に在ますと云ふ大なる御約束と (3)聖靈の降り給ふ事を待つ事を彼等に語り聞かせ給ふて後遂ひに彼等を祝し給ひつゝ離れて天に昇り給ひました。斯くキリストは榮光なる復活の體を以て昇天し給ひましたが、此の時御弟子等は誰も悲しまず又寂寞を感せずして反つて喜びに充たされました。其はキリストの復活によりて弟子等の心底に動かすべからざる信念が出來、又彼等が眞心を以て主の大なる勝利の喜びに與かりし故に今主が其の永遠の御住所なる天に昇り給ふても、主は靈によつて確かに御弟子と共に在まし給ふのみならず、彼等も遂に再び主に見ゆる事を得ると深く信じて疑がはなかつたからであります。（昇天日特禱及び哥羅西三〇一―四參照）

『全能の父なる神の右に座したまへり』

此條を唱ふる時に私共は主が現に高き寶座に在まして私共の爲め仲保を爲しつゝ居給ふ事を想ふのであります。主キリストは九天の上に昇り聖父の右に、即ち最大の名譽ある聖座に座し給ふのであります宮殿の玉座には唯だ王のみ座し給ひますが若し他の王が來られたならば必ず御同席なさるでありませう。こは兩方ながら同地位であるからであります。其と同じく主キリストもアタナシオ信經に「其の神性によれば父と等し」とある如く父なる神と同等で在ますことの證として共に寶座に座し給ふのであります。キリストは（一）私共

來十〇十二、十三　彼得前三〇二二、腓立比二〇九　來六〇十九、二十　約翰十四〇二三　約翰十六〇七　使徒二〇三三　以弗所四〇七、八

來七〇二五、
九〇十一十二、二四—二六
約壹の書二〇一
以弗所一〇二十—二二
哥林多前十五〇二
哥羅西三五
以弗所一、二〇六
來四〇一四—一六十一〇十九二二

の前驅として（二）私共の爲め處を備へんとして（三）最大の賜なる聖靈を灌ぎ給はんが爲め（四）絶えず父なる神の聖前に私共の仲保、即ち祭司の長として自らの犧牲を以て取なしを爲し私共の祈禱を取つぎ給ふ主として（五）私共を治める王の王、主の主として尊き御働きを私共の爲めになしつゝ高き寶座に座し給ふのであります。只今にても私共は靈に於て主と共に天に在る事が出來又主の御取成によりて憚からず祈禱する事が出來るのであります。

汝等心にて主を仰げ
我等仰ぎて主を望まん（聖餐式文）

右は使徒時代より傳りたるものにて祈禱書中最も古き言の一であります。

御再臨

彼處より來りて生ける人と死れる人を審き給はん

使徒一〇七
馬太二四〇三六
馬可十三〇三二、三七
テサロテア前一〇十
使徒一〇十一
約翰十四〇二十一二十三

【敎授要旨】大なる希望と敬虔の念を以て主を待ち望むこと。

此の壯嚴なる一句は私共に主キリストの御再臨と最後の審判との二つを敎へます。

（一）『彼處より來りて』とありますから主の御再臨なし給ふことは確かな事實であることは明白であります。唯だこの事に就て單純明瞭な御約束の外に何事も殆ど知られないのであります。其の期日も聖書中に明示してありませんから、如何程後の事か或ひは如何程近い事かを判知する事は出來ません、其故に私共は常に之れが準備をなして主の御出が如何に速であつても狼狽せぬ樣に心懸けねばなりません。其の來り給ふ時には實際に私共の目に見ゆる人格を備へて降り給ふのであります。御昇天の時主の消え行く御姿を眺めて居た御弟子等に天使が告げた言に『此のイエスは汝等が彼の天に昇るを見たる其の如く復來らん』とあります。或る人々は主が唯だ信ずる者の

提摩太後二〇十六―十八　彼得後三〇三　來九〇二八　默一〇七

馬太廿五〇卅一　デサロニケ前四〇十三―十八

默廿〇十一―十五

心に靈に於て臨み給ふのであると說き、他の人々は又其の御審きのことを國民や個人の上に時々下し給ふ罰、例へばエルサレムの滅亡の如きもののみを云ふのであると考へますが、其れは足らざる考であります。王の御再臨と私共信者の復活は密接な關係を有して居ります。

約翰默示錄に『萬ての眼彼を見ん』とあり、又馬太廿六〇六四には『人の子大權の右に座し天の雲に乘りて來るを汝等見るべし』とありますから、私共は決して之を疑つてはなりません。是は實に榮光ある御再臨であります。

(二)未來の審判　(イ)『生ける人』とは御再臨の當時地上に生存して居る者等のことで　(ロ)『死ねる人』とは世の始以來其の時までの死人のことを云ひます。凡て生ける人も死ねる人も如何なる時代の如何なる國民も皆其の思想、言語、動作殘らず洩れず審判主なる神の御前に審きを受けねばなりません。神は世界の人類を一般としても個人

羅馬十四〇十―十二、哥林多前四〇五、同後五〇十、詩一一三九―一四、哥林多前三〇十三―十五、

としても悉く之を熟知し給ふのであります。キリストの贖によりて救はれたるものも其行爲如何によりて異なつた報を受けるのであります。一方面より見れば人の行爲は常に神の御檢べを受けて居り、私共各自も互に審いて居りますが、人の行爲は善惡共に隱れた事が多くて公平なる裁判を到底望み得られない事であります。神の御審判のみは完全に眞實を表現するものであります。或る意味に於て因果應報は今日に於ても私共の眼前に明らかに行はれて居ますが、此の終末の審判の日は人類の社會の始めより以來活動する神の法律が完全絕體に成就する時であります。斯る審判は如何にも神の嚴酷な事を現はす樣でありますが、人生に關する諸々の難問も、之に關して神の今まで無言であり給ふた事も此の終りの審判によりて一切明瞭になるのであります。神には萬の人を善惡共に最後の日まで忍耐して待ち給ふ餘裕がありますが、故に實際神の無言は其の聖言と同樣恐れ戰くべき

馬太二五〇三一、三二
約翰五〇二二、二七—二九
使徒一七〇三一
羅馬一四〇九—一二
提摩太後四〇一

默示錄二十〇一二一五
路加十〇二十
哥前十一〇卅一
約翰壹の書二〇二八
使徒二四〇一六

ものである事を忘れてはなりません。其の審判主はキリスト御自身であります。キリストは神にして人で在します故に智識と同情に於て全く殊に御自分の經驗により人類の凡の困難と荏弱を充分に熟知し給ふ完全な審判主であります。聖書の中に終りの日の審判の事を錄す處に『書又は生命の書』といふ言があります、之は唯だ比喩でありますが、やはり其の中に大いな眞理を含んで居るのであります。私共は常に神の臺前に立つ時の準備をせねばなりません。其の準備をなす方法は（一）先づ油斷なく己を檢らべ常に人よりも己を裁くに嚴重にする事。（二）神に願ひ求めて自己を探り己の眞狀を明に示さるゝ樣に祈る事。（三）日々の極めて些細なる罪をも心より悔い改め其の度毎に神の御赦を求むる事、又主の好み給はざる事は全く之れを放棄し常にキリストの中に居る事を勉め、パウロの如く自ら勵みて神に對ひ人に對ひ良心の責なき樣勉むる事であります。斯く怠らず準備を爲

約五〇廿四

羅馬八〇三三、三四
加拉太一〇四
約翰壹書二〇二八四〇一七一八

すと共に、私共はキリストが審判主であることを思ひ、罪馬八〇一の『イエス・キリストにあるものは罪せらるゝことなし』といふ大なる慰めを感ずるのであります。主は(1)私共を今の惡き世から救ひ出さん爲め、(2)審判の恐怖より救出さん爲めに私共の罪の贖として自身を與へ給ひました。キリスト・イエスに賴れる聖徒の地位に就て哥羅西一〇十二—十四に美しく示してあります。聖ヨハネが主を信ずる者の罪の耻より救はるゝ事及び全き愛は審判の日に於ても恐をのぞくと云ふ事を記載した處を見れば、私共は終の日の審判主なるキリストに常に信賴し、今も審きの日も其の聖なる愛の御手に私共をゆだね奉りて全き平和に居る事が出來るのであります。斯すれば審判を恐るゝよりも寧ろなつかしき主の御再臨を迎へ、主と偕になる喜を心に充たし、使徒等及び初代の信徒が切に待ちわびた如く主の御再臨と聖國の來たるを待望む心が益々強くなるに相違ありません。

キリストの顯はれ給ふを慕ふ者に特別の御祝福が傳へらるゝ事及び其の時に受くべき恵の事は提摩太後四〇八、提多二〇十三、哥林多前一〇七、腓立比三〇二十、希伯來九〇二十八に委しく記載してあります。

腓立比三〇廿、二
十一帖撒後一〇七
彼得前一〇五、三
一約翰壹三〇二

新約聖書の最後の祈禱は默示錄二二〇二十の『主イエスよ來り給へ』であります。主來り給ふ時には私共難める者も平安を得、特別なる恵を與られ、神に肖る事を得、身體と靈魂の全き救を得るのであります。

キリスト教會はキリストの第一の御降臨を記念する爲め毎年降誕祭を祝しますが、第二の御降臨を記憶して其の準備を爲す爲めに毎年クリスマス前の四週間を以て之に充て、世の人が年末の用事に忙殺されて居る間に、主の聖徒等は嚴かな思ひと靜かな心を以て、終りの大なる日、主の聖前にて己れが一生の萬ての思と言と行とに就いて審判を受くる事を記憶し、祈禱によりて力を享けて、其の準備を勵むのであります、此を降臨節といひます。

我は聖靈を信ず

【敎授要旨】志願者をして其の生涯の間聖靈の助を祈り求め且つ待ち望ましむる事。

聖靈に就て猶は詳細なる敎を按手式の準備の時に信者に授けるのでありますが、然し此の問題は實に大切なもので信者各自に深き關係を有して居ますから、按手式まで待たずに成るべく早くより充分に考究させる事が肝要であります。聖洗式に於いて會師は志願者が水と靈との洗禮を受けらるゝ樣に祈るべしと會衆に告げます。之は實に受洗者に取りて大切な事でありますから、志願者を敎へ導く敎師等は、特に此の點に注意し、受洗者に初より聖靈を敬ひ慕ひ其の助力を切に希望せしむる樣心懸けねばなりません。主イエスが御在世の時に此の事に就き最も明白にニコデモに御話しになつて人の心が聖靈によ

約翰三〇三五

りて新に生れ變らねば神の國を見ることも之れに入ることも出來ないと委しく御教へになりました。多くの受洗者が信者となりて間もなく再び迷の道にふみ入り之の憐れなる罪の生涯に立ちもどるは、全く其の人々の第一歩を過つたからで、若し神の聖名に入れらるゝ場合に、聖靈なる神をして充分に其の心に働かしめる事が出來たならば決して斯く墮落することは無いのであります。然るに不幸にも受洗の準備不完全の爲めか、或は己が心底に特別な理由ありてか、信徒の生涯の第一段である洗禮の機に聖靈が聖旨のまゝに働き給ふこと出來なかつた爲め、斯る恐るべき結果を生ずるのであります。其の故に教師は注意に注意を加へ、此の點を志願者に充分說き勸めねばなりませぬ。

聖靈なる神

父も子も聖靈も神たる事は一つなり、其の榮光等しく、威稜限りなし父に在る如く子にもあり、聖靈にもあるなり、父も神、子も神、聖靈も神なり、されど三つの神にあらず唯一の神なり（アタナシヨ信經）。聖靈は單に一つの感化や恩惠や賜でなく、生ける主に在しまして、聖書中の主キリストの御言や他の聖句にある如く、神の他になす事の出來ない事を爲し給ふものであります。キリストは嚴かに父なる神と御自身と の中に聖靈をも加へて語り給ひました。ニケヤ信經にも聖靈は『父と子と偕に拜み崇められ』とあります。されば私共は聖靈を崇め拜みて直接に祈禱や感謝を献げまつる事が出來るのであります。（歎願參照）

馬太二八
〇一九
哥林多後
十三〇十四

みたまのかみよ　くだりませ
みてにつくられ　みてにつく
われをあはれみ　わがうちに
たへなるめぐみ　みたしてよ（古今聖歌集百五十九）

此は聖職及び監督按手式に用ひられ、又屢々個人の祈禱として用ひらる

非常に古き歌であります。

此聖靈なる神を父なる神、子なる神の樣に明白に信ずる事を困難に感ずる人々もありますが、其の理由は私共は己が肉體の父の愛、父に信頼する事なぞ日々見聞し經驗する處を基として、天に在ます父なる神のことを推知し、又子なる神に就ては其の受肉降誕、地上の御生涯、及び私共人類の爲めの御苦しみ等によりて私共に密接に關係し給ふことを思ふのであります。然し聖靈なる神に就ては之に異なりて、私共の五官の經驗より之を推量して其の實體を悟る事が出來ない爲めに、聖靈なる神の觀念を把持する事、稍困難であるは事實であります。もつとも未信者が聖靈に就いて分らないのは當然で、人は皆聖靈の御働きによりて其の罪を悟り悔改めに至るのでありますが、たとへて申せば信者になるまで聖靈は專ら外部より人に働き給ひ、愈々信仰に進むに從ひて內部よりも自由に御働き下さるといふ樣な有樣でありますか

ら、未信者が信仰の生涯に入りて益々深く進むにつれて、漸々明白に聖靈なる神を知りたてまつる樣になるのであります。聖靈なる神は實際私共に常に近く在まし給ふのであります。主イエスの聖言に『彼汝等と偕に在り且つ汝等の裏に在ればなり』とある如く、信者各自の心に住み給ふのであります。其の故たとひ私共の肉眼に見えずとも常に私共に伴ひ給ふ天來の友として、此の聖靈なる神を熟知する樣に勉めねばなりません。

聖靈の啓示

聖靈なる神を啓示せられたのは、極めて徐々たるものでありました。舊約時代に於ては唯聖なる能力の象徴として、人が交際するとの出來る特別の人格を備へ給ふた神として啓示せられませんでした。勿論其の當時にても聖靈の能力の大なる働きにより其が人格を備へた神たる御性質を多少伺ひ知る事は出來たのであります。例せば

創世記一〇二
創世記六〇三
出埃及三一〇二—六

馬太一〇二十
路加一〇三十五
路加三〇二二、四〇一、十四
彼得前一〇十、十一
同後一〇廿一

（一）『神の靈水の面を覆ひたり』

（二）『我靈永く人と爭はじ』

（三）『神の靈をこれに充して智慧と了知と知識と諸の類の工に長せしめ云々』の如し。新約に於てすら此の眞理は一時に御弟子に了知せられずして、約束せられたる聖靈が事實となつて顯はれ給ふたによりて始めて充分知られた事は、使徒行傳及使徒書に錄されてあります。勿論新約書の始めに天使が主イエス・キリストの御降誕に關してヨセフとマリアに告げ給ひました言に『其生れ給ふは聖靈による』とあります。其の外主イエス・キリストに關して聖靈の事が錄された處は隨分多くあります。尙聖書に就ては『神に屬する聖き人聖靈に感じて語りしものなり』とあります。聖靈は人に肉的、智的、靈的の生命を與へ給ふ主で、ニケヤ信經に『聖靈は生命を與ふる主』とあります。此の聖なる三位一體の奧義は主キリストにより始めて明らかに敎へ

約翰十四〇十六、十七、二十六、十六〇七—十五

られたのでありますが、舊新約共に聖靈の啓示は前述の如く徐々たるものでありました。

約束の慰藉主

私共の知れる範圍に於て、主キリストが聖靈に就て明瞭に御弟子に語り、御自身が彼等を離れ去り給ふた後に聖靈が慰藉主として新たなる偉大な働きをせんが爲め降り給ふ事を約束したまふたのは、主が十字架に懸り給ふ前夜に於てゞあります。それ故聖靈なる神の事を委しく知り度いと思ふ者は、約翰傳十四、十五、十六章を研究する事が大切であります。希臘の原語で此の『慰主』なる語は廣い意味を有し、慰主たると同時に擁護者、助主、力を與ふる者、仲保者等の美しき意義を含んで居ります。主キリストは御弟子の要求のみならず、現代の私共及び將來の信者の必要をも能く熟知し給ふて、此の如き完全なる慰主を送る事を約束し給ふたのであります。

左に錄す處は敎師の便宜により按手式の準備の時まで延ばすも可なり

御約束の成就ペンテコステの日

使徒二〇

約翰七〇三九
使徒二〇三三

聖靈は如何なる有樣で降り給ひましたかといふに、イエス・キリストの如く人の形體を備へ給はず、靈なる神として顯はれ、御弟子の心靈上に働き給ふたと同時に、御臨在の證として外見上の徴をも示し給ひました。聖靈の降り給ひました時はキリストの御約束の通り主の昇天、即ち贖罪の事業を完成して榮光の寶座に昇り給ふた後の十日目、ペンテコステの日（大なる收穫感謝の節）でありました。其時聖靈が何人の上に降り給ふたかといふに、不信なる一般の人々へでなく、キリストの忠實なる御弟子等即ち御約束を信じ祈をもて待ち望み居た弟子達に臨みたまふたのであります。私共が聖靈なる神に就いて多く錄されたる使徒行傳を讀む時に、御弟子等が受けたと同じ御助けと御力を自分も戴き度いと切望するのであります。此の大なる御祝福は唯

に昔の使徒等に與へらるゝのみであらうか。使徒行傳二〇三八、三九のペテロの言によれば、眞に悔改めて洗禮を受ける者は皆此の聖靈の賜を受けることが出來るとあります。されば萬てのキリスト信者特に神の聖旨に從ひ聖靈を憂へしめざる者は、必ず往古の使徒等と同じく聖靈の御內住によりて、聖徒に適はしき生涯を送り、又神の御證を立てる爲めに必要なる萬ての恵と力に浴し得る事は、疑もなき事實であります。

敎會內に於ける聖靈なる神

聖靈なる神はペンテコステの日に新たなる働きを聖徒の心に爲し給ひてより、今日に至るまで之を持續し給ひます。父なる神と子なる神とは聖靈なる神を遣し給ふて敎會なる團體の內に住み、又聖奠や其の外の方法を用ひて信徒個々の心に愛と助の御使命を全うし、且つ敎會を通じて一般の世界に働き給ふのであります。

約十六〇八—十四以弗所六〇十八、ロマ八〇二、十一ユダ二十賽十二〇二、三、ロマ八〇廿六、ロマ五〇五哥後三〇十八

哥前六〇十一エペソ三〇十六、七

尙聖靈に就いて左の事を學ぶのであります。即ち聖靈は先づ人の心に罪を悟らせ、主キリストを顯はして神に屬ける潔き願を起させ、新しき生命を與へ、聰明の靈を給ひ、祈禱を助け、愛を灌ぎ、私共の靈魂を靈化してキリストの聖像に似させ給ひます。公會問答に『我と凡て神に選ばれたる民を潔め給ふ聖靈なる神』とありまして、其の御働きの現在にある事を示してあるに注目せねばなりません。聖靈はキリストの代理ではありませんけれども、常にキリストを私共に紹介し私共に近づけ給ふ故に、聖靈の在ます處には必ずキリストも在ますので、聖靈は絶えずキリストの御臨在を確實ならしめ給ふのであります。

聖公會

また聖公會。聖徒の交通……を信ず。

【敎授要旨】敎會の尊き事及び其の內に加へらるゝ大なる特權を喜ぶこと。

使徒二〇

前にも述べた通り、之より以下の數ヶ條は皆『我は聖靈を信ず』といふ條と密接に關係して居るものであります。扨て此の聖なるキリスト公會は、舊約時代のものと聯絡がついて居りましたが、ペンテコステの日に聖靈なる神の降り給ふたに由りて始めて建てられ聖別され、爾來今日に至るまで偏に聖靈の絶えざる御働きによりて繼續して居るものであります。英語の『敎會』と云は『キリストに屬する』と云ふ意味でありまして、此處にいふ聖公會とは重に主キリストの建て給ふた洗禮を受た忠實な信者の團體を指すのであります。即ち惡魔と惡人の種々雜多な反抗と奸計、僞善と妨害のあるに關らず、ペンテコステの大なる日より今日まで、更に又キリストの御再臨まで繼續するやう、キリスト御自身が地上に建設し組織し給ふた一團體であります。

使徒二十〇二八

キリストは斯の敎會を我がものとせんが爲め寶血を以て之を贖ひ給ひました。故に若し此の聖徒の團體が存在しなかつたならばキリ

以弗所五 〇二五—二七、以弗所四 〇五

ストの死は徒勞に歸するのであります。此の團體に屬する人々は主一つ、信仰一つ、バプテスマ一つといふ個條の下に一致合體して居るのであります。敎會は地上に於けるキリストの代表者、世界人類に對するキリストの證人で聖書と聖奠とを授與せられたるものであります。

使徒二十 〇二八 以弗所五 〇二五—二七、以弗所一 〇二二、二三、〇二二

神の王國は信者の心中に建てられ、又形體を備へた敎會として地球上至る處に建設せられるのであります。此の團體の名は即ち聖公會であります。何故に斯く聖公會と稱へますか。此處に少しく分解して述べませう。

(一)聖といふ所以

(イ)其の建設者は神の子たるキリストで、主は之れが爲めに死に、之を深く愛し給ひます。(ロ)敎會の首は神の聖子で、敎會は主の神秘な體であります。(ハ)其の內住の力は神の聖靈で、聖靈は敎會を潔め導き、扶助し、力を與へ、又統治し給ふのであります。(ニ)其の會員は聖徒と稱へられ、洗禮に由りて神と聖なる交際を結び、又會員相互に潔き睦びに連なり同心たる事を得るのであります、聖徒の交際は其の心中に於ても日々の言行に於ても潔くなくてはなりません。(ホ)敎會は天に於て全く聖くなり、主と一層深き一致に入る最終の時を喜びて待ち望んで居るのであります。

哥羅西一 〇一八 羅馬十二 〇五 羅馬一〇 七 哥林多前一〇 九 約翰壹一 〇三、四 哥林多前一〇 一 哥林多前六〇 十 同後六〇 十四—十八、七〇 默示錄五 〇九、十 馬太二八 〇十八 詩七六 〇二

(二)公即ち一般といふ所以

此の敎會は諸族諸音諸民の爲めであり、且つ萬の時代に亘つて居る敎會で、又ユダヤ人の敎會の如く獨特の民族に限り或は定つた期限だけのものでなく、苟くも洗禮を受けて敎會に入るものは皆此の世界を通じて廣く建てられた一大敎會の會員となるのであります。さらば決して自分が洗禮を受けた聖堂に屬して居る一小團體に加はつたのみではありません。故に全世界の聖なる公會の爲め常に祈禱する事は、私共の當然の務であり、又喜びである筈であります（讃美の頌參照）

以弗所二〇十九

約翰十七〇一四—一六

又此の教會は世人の爲めの公會であります、貧富貴賤賢愚の差別なく何人でも之れを願ふ者は、皆此の美しく暖かな神の大家族に加はる事が出來るのであります。

(三)會といふ所以

此の會は普通の社交とは全く異なりて、前にも說いた通り『キリストの體』『神の家に屬する者』即ち神の家族で、時によりては大軍隊の如くにも說かれてあります。それで誠實な會員はキリストの肢であり、又キリストの爲めに戰ふ光輝ある武夫の仲間であります。私共キリスト信者は地上に神の王國を建設する大業を助ける名譽を擔ふて居る者でありまして、此の會は即ち其の王國の中心であります。是を考へる時に、キリストが宣ふた如く私共は世の中に居りて而も世の屬でない事を常に記憶せねばなりません。

教會の歷史

使徒行傳には初代教會の事を多く錄してあります。教會は最初亞細亞の西部ユダヤ國に設立せられ、次第に北方に擴り、アンテオケ（此處にて信者は始めてキリステアンと稱へられたのであります）歐羅巴、亞非利加、印度、支那と漸次世界に擴まりましたが、同時に非常な迫害が各所に起り、其の結果教會の或者は信仰を失ひ、又亞細亞、亞非利加に於けるキリスト教は一時殆ど根底より覆へされましたが、全く消滅しませんでした。斯くてキリスト教は益々西部に發展して遂に歐羅巴が其の中心點となり、後幾百年の間傳道の精神は、いまだ鈍く有りましたが、福音を廣く世人に知らせんとの計畫が折々企てられました。其の後遂に教會が一般に目を醒して自己の責任を自覺し發奮努力する樣になりました。從つて亞細亞、亞弗利加等に於てキリスト教は復活し或は新たに傳道せられ、現今世界各國の信徒が皆傳道するやうに成りまして日に月に地の四方に擴がつて居るのであります。馬太十三

使徒行傳一〇廿六

〇三一―三三のキリストの御比喩が事實に現はれて來たのは誠に聖靈の大なる御働に他ならぬでのあります。

聖公會の三特色

使徒信經の作られし當時は、未だ敎會が分れざりし故信經中の『聖公會』とはキリストの全公會を意味します。然るに其の敎會の內に分派が起つて種々の名稱の許に別々になりましたが、現今聖公會と呼ばれて居る公會は初代敎會の歷史的後裔であつて以下の三特色を備へて居ります。

(一)使徒信經及びニヤケ信經を信仰の基礎として遵奉して居る事。

(二)洗禮と聖餐の二大聖奠を有つて居る事。

(三)監督、長老、執事の三階級ある聖職を歷史的に傳へられて保持して居る事。

聖公會信者の他の一の特權は祈禱書を用ふる事で、之によりて受くる便益は

(イ)會衆全體が牧師と同じ心をもて祈禱し得る事

(ロ)式文排列の順序と其の美しき用語とは敬虔、尊嚴の念を保持し發揮する一の助となつて步一步と神の聖前に進み得る事。

(ハ)聖書の各部分を平等に讀み得る事。

(ニ)諸大祝齋日及びキリストの御生涯中の重もなる出來事を紀念し得る事。

以上の事柄を考へて見れば或人々の聖公會より離るゝ事が如何に惜むべき事たるかが分かります。

聖徒の交際

聖徒とは敎會の會員を云ふのであります。信者は皆潔からんが爲めに召された者取も直さず聖徒でありますが、中にも特に其の負ふて居るキリストの聖名に適はしい高潔な生涯を送るものを聖徒といふ

のであります。眞に心靈上の智識ある者のみが『聖徒の交際』の深味を經驗出來るのであります。此交際は

(一)聖靈を通して父なる神及び子なる神と交通する事

(二)信者相互に交際する事

此は愛と同情を以て交際するもので、一の信仰、一の禮拜、一の目的、神の爲めの一の働きに由りて信徒一同全く一致結合して、見えざる靈の繋の內に潔き交際を結ぶものであります。信者は神に事へる爲め互に助け合ひ、互に重荷を擔ひ、親切と忍耐とを以て互に赦し、互に勵まし必要の場合には忠實に相誡しめる筈であります。信者の交際は潔きを旨とし、行爲にも外見にも世人の前に神の榮光を一層現はす樣勉めねばなりません。さらば常に貞操を重んじ、克己自制を勉め、禮節を怠らず、萬事に高潔でなくてはなりません。敎會に於ても私宅に於ても相互の爲めに祈る事は必要であります。祈禱によりて大に人を助け

約翰十四〇二三、約翰壹一〇三、哥村多前一〇九、以弗所三〇十六、十七、以弗所四〇一—六、約翰十三〇三四、三五、羅馬十五〇一—三、加拉太六〇一、二、羅馬十二〇十七

得る事が出來るのであります。外に助ける道が無い時でも神に通ずるの道だけは惡魔も之れを閉ざすことが出來ませんから、人の爲めにも自分の爲めにも、如何なる危急切迫の場合にも如何なる暗黑絕望の折にも、祈禱によりて再び光と平和に至る惠みを戴く事が出來るのであります。故に互に人の風說や品定めをするよりも寧ろ其の人の爲に私かに祈るならば、彼を助け我を益すること多大であります。利己嫉妬、羨望等を勉めて心中より消滅させる事も亦最も肝要であります。斯る賤しき汚れた思想が私等の心の奧に潛む時は眞に聖徒の潔き交際をする事は全く不可能で、よし强ひて交際しても其れは僞善に過ぎずして主の甚だ憎み給ふ處であるから、惡に惡を重ねる事となります。故に若し心に斯る煩はしき罪が少しでも殘るならば、速に聖靈なる神の潔き焔にて焚き潔めらるゝ樣切に祈らねばなりません。又悲しむ者と共に悲しみ、喜ぶ人と共に喜ぶ事を學ばねばなりません。喜びを

羅馬十二〇十五